

沖ノ島出土馬具の復元的研究

はじめに

宗像市沖ノ島は、宗像神湊から対馬北端を経由して釜山・蔚山に向かう国際航路上の要衝にあり、祭祀遺構二三か所から遺物約8万点が出土した。うち四・五・六・七・八・九号の六遺跡に馬具を伴い、多くはわずかな落葉に覆われた状態で配列当時の状況をとどめて出土した。沖ノ島は、禁忌によって一木一草持ち出しが禁じられ、祭祀遺跡も古代から現在までほぼ手付かずで守り伝えられてきたとされる。しかし文化財保護の意識が希薄、もしくは研究のための取り扱いが現在とは異なる時代に、沖ノ島から奉獻品が流出した事実があることも知られている。江戸初期には黒田長政が切支丹に祭祀遺物を持ち出させて福岡城内に置くも、神職に返却して島内の谷に埋めさせた。また明治二一年に江藤正澄も遺物の一部を持ち出した。江藤は神職の傍ら、福岡周辺で多数の遺物を蒐集し、一部は明治二九年に伊勢神宮徴古館に納められた。同館蔵品の出土地不詳の金銅装馬具類に、沖ノ島出土品を含む可能性がある(図一)。中でも双鳳凰文杏葉の文様板は、藤ノ木古墳馬具よりも精巧な出来とされる。また心葉形十字文忍冬文透鏡板は、前者とセットの可能性がある。

沖ノ島砲台の守備兵が持ち出した山形県致道博物館の銅矛なども知られ



図一 伊勢神宮徴古館 出土地不詳馬具
 1 心葉形十字文忍冬文透鏡板
 2 双鳳凰文杏葉文様板
 3 心葉形鏡板・杏葉 4 棘葉形唐草文透杏葉



図二 伝沖ノ島出土 金銅製香炉形製品

桃崎 祐輔

ているほか、奈良県天理参考館には、守屋美好氏（蒐集家として著名な守屋孝藏氏の子息）の藏品中より梅原末治氏によって発見された出土地不詳馬具類が収蔵されている（高野政昭一九九一）。その内訳は、金銅装鏡板3枚2セットを含む、複数の馬具セットに由来するものだが、沖ノ島出土の杏葉や辻金具類と製作技法や銜徑銜間隔などに共通点が認められるものを含んでおり、特に心葉形杏葉の一枚は、内区の残存透彫文様や吊鉤金具の構造などが沖ノ島七号遺跡の十字形辻金具＋心葉形忍冬文杏葉と全く同一である。この杏葉はまた、同じく守屋美好氏旧藏品の心葉形十字文忍冬透鏡板とセットの可能性が高いという。

戦後の本格調査以前、沖ノ島の祭祀遺物の一部は、石室状をなす御金藏（四号遺跡）に二次的に集積されていた。柴田常恵氏によると、大正年間御金藏の整理が行われ、金属類は一括して田島村の邊津宮社務所に移され、それらの中には鍍金の残存するものもあった（柴田常恵一九二七）というから、馬具も含まれていたと考えられるが、現存しない。

よって馬具も、部品の一部が象徴的に供献されたのではなく、当初は完全なセットで供献されていたものが、風雨やオオミズナギドリ攪乱で風化破損し、バラバラの破片となり、さらに度重なる持ち出しでセットが棄損されていたと考えるのが妥当である。よって発掘調査で回収された沖ノ島祭祀遺物は、過去の供献遺物全体の一部に過ぎないと判断される。沖ノ島から持ち出された可能性がある「出土地不詳品」との対比も含め、本来の奉献遺物を復元する手続きが必要である。

一 沖ノ島出土馬具の調査史

『沖ノ島』では、原田大六氏が馬具類を報告した。7号遺跡の王塚古墳と同タイプの棘付剣菱杏葉や辻金具、羽人透彫心葉形杏葉、棘葉形杏葉、歩揺付雲珠、鉄製銀象嵌鉢形雲珠、玉虫羽雲母入帯先金具、8号遺跡の金線象嵌鉄製鞍、歩揺付雲珠等からなり（原田大六一九五八）、6世紀中葉後半のものが主体である。『宗像 沖ノ島』報告では、佐田茂氏が4号遺跡（御金藏）の帯先金具残欠、鉸具、菊銜辻金具、歩揺残欠を報告し、7・8号遺跡の遺物の一部が二次的に持ち込まれていたと判明した（佐田茂一九七九）。また松本肇氏が報告した6号遺跡では、有蓋銅鏡・土師器とともに歩揺付雲珠1、鉄製銜などの7世紀前半代の馬具が出土した（松本肇一九七九）。その後、重住真紀子氏は上原孝夫氏蔵の伝沖ノ島出土花形鏡板を報告した（重住真紀子二〇〇五）。

二 研究の現状と課題

諫早直人氏は、沖ノ島の新羅系馬具のうち、沖ノ島A棘葉形杏葉のような扁平な花形銜は新羅古墳出土馬具にみられないことから、「新羅馬具の影響を強く受けつつも大加耶で製作された」とみた（諫早直人二〇一二）。二〇一七年に九州国立博物館で開催された『宗像・沖ノ島と大和朝廷』展では、沖ノ島出土の金銅製香炉状品が注目された。かつて岡村秀典氏はこ

の特異な遺物を北魏製とみた（岡村秀典二〇〇七）が、市元皇氏は北朝（隋の絵画や俑にみられる馬の頸総と呼ばれる垂れ飾りの可能性を指摘した（市元皇二〇一六）。桃崎は沖ノ島7号遺跡の祭祀遺物群は、様々な集団が、異なる祭儀神話に沿って執行した儀礼の集積であり、玉類・武器・馬具類は、『日本書紀』記載の宗像神誕生の情景を再現するモノザネであると考えた。さらに羽人杏葉が南北朝中国につながるモチーフであることを指摘した（桃崎祐輔二〇一七）。その後桃崎は、「沖ノ島の馬具」で、沖ノ島には少なくとも国産三セット、舶載七セット、合計一〇セットの豪華な金銅装馬具が供献され、実用的な素環轡などはなく、六世紀中葉を上限、七世紀中葉を下限とし、継体・欽明朝の交替期から、舒明朝の間とみられる。また北朝もしくは隋・初唐前後の頸総を含む可能性があることを指摘した（桃崎祐輔二〇一八b）。しかし中国在外研究の一時帰国中の短時間の検討結果であり、十分なものではなかった。また桃崎は伝津屋崎出土龍文透彫鏡板の検討に際し、天理参考館蔵の楕円形十字文双龍文透鏡板（高野政昭一九九一）が、沖ノ島七号遺跡出土の心葉形羽人文透彫杏葉と立間金具の法量・形状・構造、銚径や銚間隔が酷似することを指摘し、沖ノ島出土品の可能性を指摘した（桃崎祐輔二〇二〇）。

三 研究の方法

沖ノ島祭祀遺跡の馬具類は、少なくとも一〇セット前後からなると考えられるが、長年風雨に晒されて腐蝕や経年劣化、オオミズナギドリなどの

動物の営巣や植物の成長による攪乱、さらに学術調査以前の人為的な移動や持ち出しなどの諸要因が重なり、奉献された当時からみれば、全体のごく一部しか遺存していない。このためセット関係をたどることが非常にむづかしい。さらに相伴遺物が特殊なうえ年代幅があるため、年代の絞り込みも困難であり、その質の高さや、舶載品を含むという事実以上には、注目されてこなかった。

しかしそうした断片的な状況であるにもかかわらず、沖ノ島の馬具類は卓越した質量を示し、当時の対外交渉や祭祀主体を考える上で欠くことのできない重要な情報を提供している。よってその全体像の詳細が明らかになれば、その価値は計り知れないものとなるだろう。そのためには、断片化した馬具類が、本来どのようなセットであったかを明らかにする手続きを踏む必要がある。馬装の復元にあたって、桃崎はかつて以下のような手順を想定した（桃崎祐輔二〇二〇）。

- ① 各部品の類例を集成し、その型式学的・年代的付けを確定する。
- ② 部品の出土状態、構造、類例のセット関係から相互の連結関係を確定する。
- ③ 部品が少ない部分や遺存しない部分の推定にあたっては、類似する組成で年代的にも接近する馬装セットのパターンを分析し、最も蓋然性の高いものに絞り込む。
- ④ それでも復元が難しい下鞍や障泥は、埴輪馬・石馬・馬俑の表現を参考とする。

以上に対し、山口裕平氏は、⑤部品数を確定する、という項目を追加し

た（山口裕平二〇〇四）。沖ノ島の馬具では、それはほぼ不可能であるが、類例との対比や、残存個体からの復元的作業によって、ある程度の作業は可能であろう。

そこで前述の特殊状況を踏まえ、本論では以下のような手順で作業を進める。

①沖ノ島祭祀遺跡の中で、馬具を出土したことが明らかな遺跡を抽出し、出土状態や共伴遺物を検討する。

②各遺跡の馬具出土状態の把握にもとづき、馬具のセット関係を地点的に分離する。

③過去の報告では、同形態で複数例があるものは、最も遺存状態の良いものを代表して実測図が提示されたため総量の把握が困難であった。ただ遺物がすべて国宝指定の現在、再実測はもちろん、全体の再調査も困難である。よって報告書の記述・掲載写真・展示遺物の検討に基づき、可能な限り地点ごと様相を把握する。

④七号遺跡では、同一地点に複数の馬具セットが供献されていることが確実視される。よって馬具セット分離のメルクマールとなる鏡板・杏葉・辻金具・鞍などに基つき②を更に細分する。

⑤沖ノ島祭祀遺跡出土馬具中、最も分離と帰属決定が困難なのは数が多いが、微細なバリエーションがある歩揺付雲珠類である。類例との比較および出土地点により一括性を把握し、帰属するアセンブリッチを決定する。

⑥前提整理が終わった沖ノ島祭祀遺跡出土馬具・伝沖ノ島出土馬具を舶

載・国産に大別する。

⑦出土状態、他の類似セットとの比較など総合的情報に基づき、個別の馬装セットに分離する。

⑧抽出した各セットを、最も近似する類例との比較検討からその性格を明らかにする。

⑨沖ノ島の各セットの馬具が示す歴史的意義についても、若干の考察を試みたい。

以上のような手順が求められるが、現状で不可能な作業は、将来の課題とし、可能な範囲で作業を進める。

更に馬装の復元は、以下のような手順を進める。

⑩馬具は形式ごとに鏡板轡・杏葉・辻金具・雲珠・鞍金具・鍔金具等の組み合わせに特有の傾向があることが知られている。そこでまず沖ノ島の雑多な馬具残欠を、形式ごとの特有のアセンブリッチに分類・整理する。また帰属するセットがどれか判断が難しい物も、吊鉤金具や脚部の幅や銜数などを考慮してグループピングする。

⑪馬具セットの部品の出土状態、構造、類例のセット関係から相互の連関係を推定する。

⑫部品が少ない部分や遺存しない部分についても、類似する組成で年代的にも接近する馬装セットのパターンを分析し、最も近似するものと同様なもので復元をこころみる。

四 各地点での馬具の出土状態と伝沖ノ島出土品

一 七号遺跡

沖ノ島D号巨岩は、沖津宮背後の巨岩群の北端に位置し、高さ六・五mを測る。この巨岩は、約六〇度の角度で参道に庇のようにせり出しており、その下の岩陰全域に遺物が散布していた。手前南側が七号遺跡、北側奥が八号遺跡である。庇の張り出した岩陰に沿って大小の割石が敷石か区画状に並んでいるが、人為的な配列ではないという。七号遺跡では東西約八m、南北約三・五mの平坦面全体に撒き散らされたように遺物が出土した。空間の中央部には鉄鏃、鉄刀、鉄剣やガラス小玉、滑石製白玉、水晶製切子玉が特に多く、東側には鉄矛や挂甲、盾状金具があり、その南東に離れて水晶製三輪玉一七個が出土した。付近では振環頭も出土し、倭装大刀が複数供献されていたと考えられるほか、純金製指輪や唐三彩など特殊遺物があり、総点数は約二〇〇〇点に上る。沖ノ島の中でも突出した質・量を誇る。益田勝実氏は七号遺跡の遺物の種類と出土状態を詳細に検討し、アマテラスとスサノオが誓約して宗像三女神誕生した神話の情景を再現するため、盾を立て並べ、甲冑や弓矢で武装した人物と、金銅装馬具を装着した騎馬人物が対峙する儀礼の痕跡であると考察した(益田勝実一九七六)。

西側(向かって左側)には金銅装の馬具類が集中していた。以下暫定的に下記のように分類する(旧称は桃崎祐輔二〇一八bでの呼称)。

A群・第四回調査で西端に棘葉形杏葉A四点が集中出土。菊鋳辻金具と併

せD(旧A1)セットとする。

B群・第一回調査で西半部の道路に接する地点より心葉形羽人文杏葉五点、棘葉形杏葉B一点、金銅製円形鞍鉸具に接して歩揺付雲珠、鉄製覆輪・鉄製磯金具鞍一式、鈴類、環状雲珠片、楕円方形鉸具、大形円形雲珠、鉄鈴などが折り重なって出土。杏葉四〜五種、鞍二種以上、多様な雲珠・辻金具より七セット前後に分離され、F(旧B1)セット(金銅製円形鞍鉸具付鞍・花形半球座十本釣手歩揺飾雲珠四点以上、心葉形羽人文杏葉五点)・E(旧B2)セット(棘葉杏葉B二以上・環状雲珠)・A(旧B3)セット(棘付劍菱形杏葉3以上・多脚雲珠・無却雲珠)・B(旧B4)セット(楕円形十字文鏡板・楕円形三葉文杏葉三)・H(B7)セット(八弁花飾十字形辻金具)となる。

C群・第一回調査でB群の南一mから透彫帯先金具、三脚菊鋳付辻金具、歩揺付雲珠が出土。このうち透彫帯先金具をG(旧C1)セットとする。

二 八号遺跡

八号遺跡では一・二m×一・五mの範囲から半球形歩揺付雲珠八個体分が集中出土し、その東側から鉄地金象嵌鞍の破片が出土した。なお未発掘部分が残るとされる。鉄地金銀象嵌鞍は、韓国慶州鷄林路一四号墳の龍文唐草象嵌鞍二点が著名である。また栃木県足利市足利公園古墳群の鉄地銀象嵌鞍は、覆輪に鱗文、海金具に亀甲繫文・鳳凰文などを施すが、文様の形骸化や鉄地銀象嵌刀装具との技法の共通から国産品とみられる。八号遺跡金銀象嵌鞍・歩揺付雲珠の位置づけは難しいが、暫定的に新羅製の舶載品

とみておきたい。

三 伝沖ノ島出土 花形杏葉セット

重住真紀子氏は上原孝夫氏藏（現在は九州国立博物館寄託）の伝沖ノ島出土花形馬具を報告した（重住真紀子二〇〇六）。報告では杏葉と判断されているが、中央の円形区画の形状や立聞構造などからみて、鏡板であった可能性もある。

なお七号遺跡で出土した辻金具の細片に、国産金銅装馬具に伴うタイプが見られ、六号遺跡に二次移動したとおぼしき鉄製銜とあわせ、上原氏所藏の花形馬具と一連のセットであった可能性があり、これらをCセットとする。

四 伝沖ノ島出土 香炉状金銅製品

「全体の姿は碗の形であるが、中帯に双竜唐草文を浮彫にし、上下帯に蓮弁を並べたものである。下端の輪縁には小孔が穿たれているので、ここに他の物としばり合せるのか、飾りをつけたものと思われる。用途は不明であるが上面の中央には方形の孔が穿たれ、蓮の中房にあたる所には一字を刻んでいる。判読した所では甲と見えるが、甲か申かいずれにしろ十干か十二支で、一連の番号を組合順序を示す符合ではなからうか。上面の蓮弁が九弁であることは、特異な分割法である。八弁を通例とすることはこの時代には珍しい。下段の蓮弁も同様の彫刻様式である。この蓮弁は一弁に子葉二枚を並べ刻み、複子葉潤弁となっている。このような文様は、

瓦当文・光背・台座にも類品が見当たらないが、飛鳥時代に盛行した単狹弁の文様より次の時代に降っていることはおのずと明らかである。しかも奈良時代を下らないことも疑ないであろう。

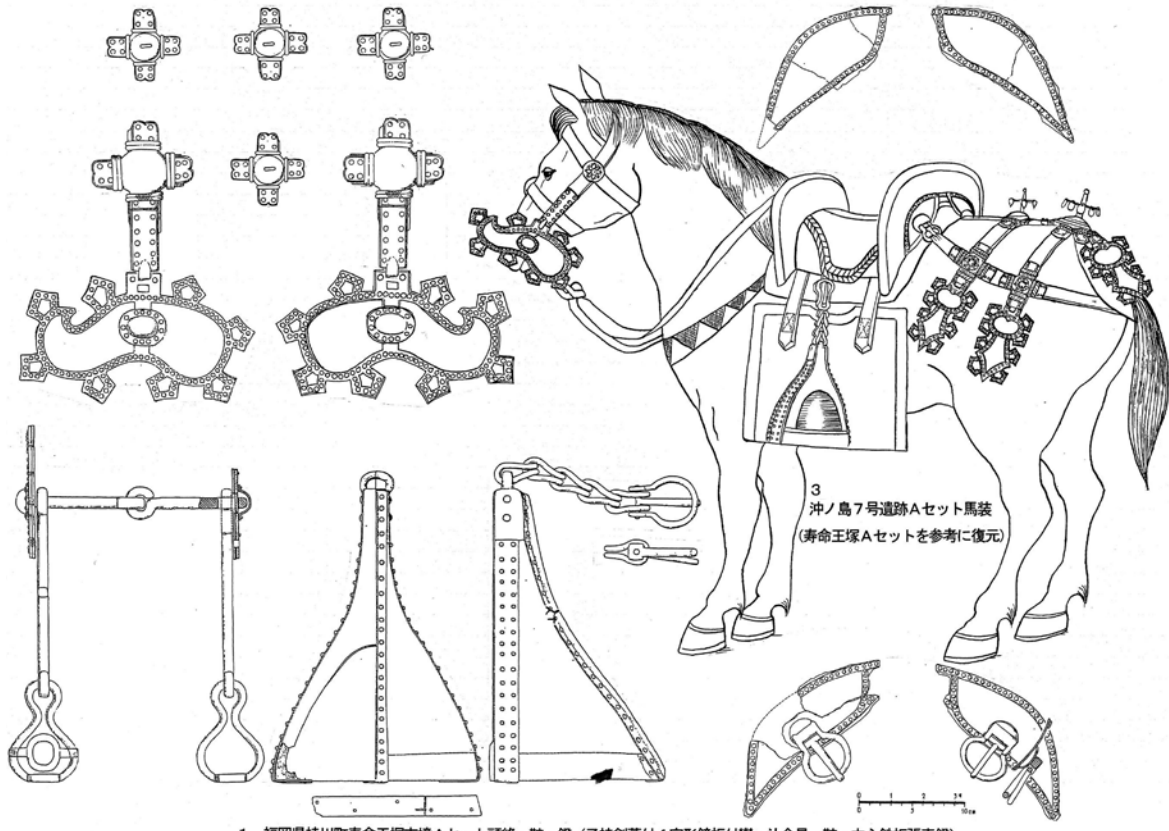
竜文は頭首また唐草文様化し、小形爪形文で表現される龍身、その中央部上下に反転する龍身渦状文、四脚も共に文様構成の一要素とも見られる。双竜は同方向にまわり、体の屈曲も大差はないが細部に亘っては一致する所がない。竜文を埋める唐草文も、竜身と相俟って自由な文様を形成するような文様と形を作りあげた金工の技を秀抜なアイデアとして賞するにやぶさかでないが、裏面から見た接着法は特異な感がする。すなわちこの器は上帯と竜文帯と蓮弁下帯と三つの部分を接着させている。上・中段の接着はかさね着けであるが、中・下段の接着は弁の数だけ小銅板を切って裏あてとし、上下二カ所で鋏留めにしたものである」（原田大六一九五八）。

五 馬具の検討

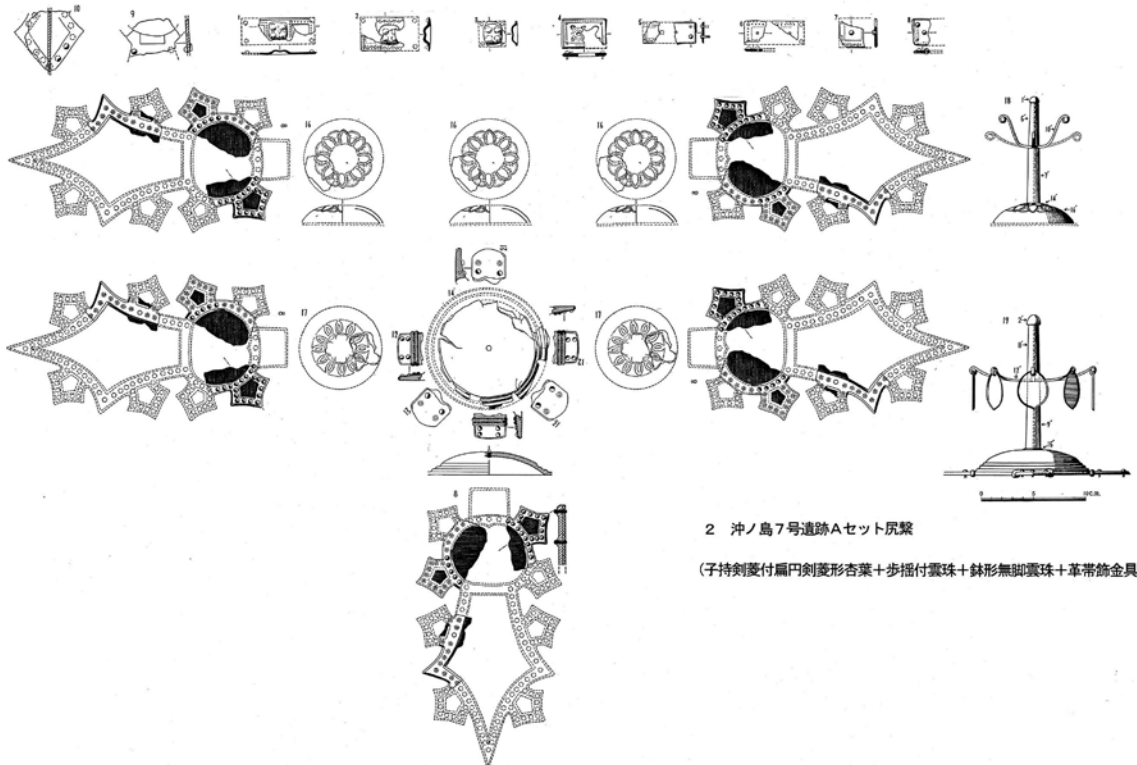
一 国産馬具の検討

Aセット…(逸…子持剣菱付f字形鏡板付轡) 十子持剣菱付剣菱形杏葉十責金具付十字形辻金具十長方形金銅張革帯金具十鉢形方形脚責金具雲珠十無脚鉢形花形雲珠(図三)

七号遺跡の棘付剣菱形杏葉片、方形脚辻金具片、鉢形象嵌雲珠片、隆起付革帯飾金具、鉢形方形脚責金具雲珠、無脚鉢形花形雲珠は、国産の子持



3 沖ノ島7号遺跡Aセット馬装
(寿命王塚Aセットを参考に復元)



1 福岡県桂川町寿命王塚古墳Aセット頭絡・鞍・鐙 (子持剣菱付f字形鏡板付轡・辻金具・鞍・木心鉄板張壺鐙)

2 沖ノ島7号遺跡Aセット尻繫
(子持剣菱付扁円剣菱形杏葉+步揺付雲珠+鉢形無脚雲珠+革帶飾金具)

図三 沖ノ島7号遺跡 Aセット (子持剣菱付f字形鏡板付轡? + 子持剣菱付扁円剣菱形杏葉 + 步揺付雲珠)

劍菱付f字形鏡板付轡+子持劍菱付扁円劍菱形杏葉のセットを構成して、たとえられる。同様なセットに、福岡県桂川町寿命王塚Aセット・大阪府八尾市河内愛宕塚・奈良県御所市條池南古墳(巨勢山六四〇号墳)・長野県飯田市開善寺古墳(飯沼雲彩寺古墳)を挙げる。

このうち沖ノ島七号遺跡例と同形同大の子持劍菱付劍菱形杏葉を伴う河内愛宕塚古墳(八尾市歴史民俗資料館一九九四)は、奈良県天理市塚穴山と石室築造企画を共有し(米田敏行一九九六)、物部氏の有力者の墳墓と考えられ物部尾輿などが被葬者の候補となる。條池南古墳は七〇〇基に及ぶ巨勢山古墳群の一基で、巨勢氏の古墳と考えられるものの、周辺の群集墳には王権の原初官僚層をも包括するとの意見もある(藤田和尊二〇〇三)。また近年、福岡県古賀市梅尾・瓜ヶ内二七号墳で、劍菱形突起のある鏡板付轡が出土した。静岡県藤枝市八幡二号墳では、素環轡二セットのいずれかに伴って十字形辻金具・小型子持劍菱付劍菱形杏葉五・鑄銅鈴一・馬鐸五・半球形花文雲珠・壺鐙兵庫鎖鑄銅鈴が出土した(榛原町教育委員会一九八六)。このセットからみて、沖ノ島七号遺跡の半球形花文雲珠も、子持劍菱付劍菱形杏葉に伴うセットであることが推定できる。ただ沖ノ島出土品では確実に頭絡やf字形鏡板付轡と判断できる部品が確認出来ない。よって桂川町寿命王塚古墳Aセットの推定頭絡を参考に示す(図三上段)(京都帝國大學一九三九)

f字形鏡板付轡・楕円形十字文鏡板+扁円劍菱形杏葉のセットに、劍菱形や鈎形の子持突起を追加した馬具は、大阪府北部の北摂津地域に集中し、梶原D一一号墳で楕円形十字文鏡板+鈎状突起付扁円劍菱形杏葉(名

神高速道路内遺跡調査会一九九八)、継体陵と目される今城塚古墳でも、楕円形突起付扁円劍菱形杏葉が出土しており(高槻市立今城塚古代歴史館二〇一六)、継体・安閑・宣化朝ゆかりの馬具と考えられる。また韓国固城松鶴洞一号墳D号遺構でも鈎状突起付劍菱形杏葉が出土している(張允禎二〇〇五)。

河内愛宕塚では、子持劍菱付f字形鏡板・子持扁円劍菱形杏葉と、花卉状象嵌のある四脚辻金具類がセットをなすと考えられている(田中一廣一九九七)が田中氏の尻繫馬装推定には異論がある(宮代栄二二〇〇三)。沖ノ島の銀象嵌辻金具・雲珠は破片化しているが、低い鉢形で、無脚か、単純な方形脚がついていたと推定され、Aセットに帰属すると判断する。鉢形部の上面に銀象嵌で花卉状の文様を象嵌する。類例で最も遡るのは、千葉県江子田金環塚で、新式f字形鏡板付轡・鐘形杏葉に伴って鉢形の銀象嵌雲珠・辻金具が出土しMT一五型式の須恵器を伴う。TK一〇期以降の寿命王塚古墳、MT八五期の南塚Cセット、TK四三期の藤ノ木Bセットにもこの種の雲珠・辻金具が見られる(松浦宇哲二〇〇四)。

以上のうち、六世紀前葉の石光山八号で七脚の環状雲珠から放射状四条に方形波状列点文金具を六・七個ずつ合計二六個前後を連結したものが現れる。ほぼ同時期頃か後出の大須二子塚古墳では方形に交差文を表現した革帯飾金具となるが、数が少ないので頭絡の部品である可能性がある。

革帯飾金具は、長方形金具の上面に半球を四つ組み合わせたような隅丸方形の隆起を伴う。この種の金具は、祖型と思われるものが長野県須坂市八丁鎧塚をはじめとする打ち出し鬼面文帯金具に求められ(山本孝

文二〇一四)、その退化したものが兵庫県神戸市中村五号墳(阿久津久一九六九)で帯金具として出土している。これに波状列点文を追加したものが馬具の尻繫の革帯に採用され、類例は福岡県宗像市沖ノ島祭祀遺跡、古賀市花見古墳、和歌山県和歌山市岩橋千塚、奈良県斑鳩町藤ノ木B組、奈良県御所市石光山八号墳、奈良県御所市市尾墓山、大阪府八尾市河内愛宕塚、愛知県名古屋市大須二子山、岡崎市神明宮二号墳、長野県飯田市御猿堂など六世紀前半〜中葉の例がある(桃崎祐輔二〇〇二)。

また熊本県熊本市打越稲荷山古墳では、長方形に半球形隆起を持ちその頂部に一鋌を打ち両端に素文の責金具を伴う革帯金具が一〇点出土している。打越稲荷山の棘葉形杏葉は、吊鉤金具に菊鋌を打っており、大伽耶製品か、これを忠実に模倣した初期の倭製と考えられる。これに類似するものが大阪府南塚古墳例で、鐘形鏡板・杏葉とセットと考えられる、長方形に半球形隆起をもちその両側に縦列三〜四個の笠鋌を打ち両端に刻み目付きの責金具を伴う変則的な革帯金具が短二、長六の合計八点が出土した(近つ飛鳥資料館一九九八)。南塚の鐘形馬具は従来、北朝系の舶載品と見られてきた(小野山節一九九〇)が、滋賀県甲塚古墳のような大伽耶系の鐘形鏡板から発展したと考えられるため、これらは大伽耶系の舶載品の初期の模倣品という共通点が窺える。

花見古墳例は無棘のf字形鏡板付轡+扁円剣菱形杏葉セットに伴う。大阪府青松塚と馬具の規格が一致すると聞き及んでいるため、継体朝の糟屋屯倉設置に伴って持ち込まれたと考えられる。

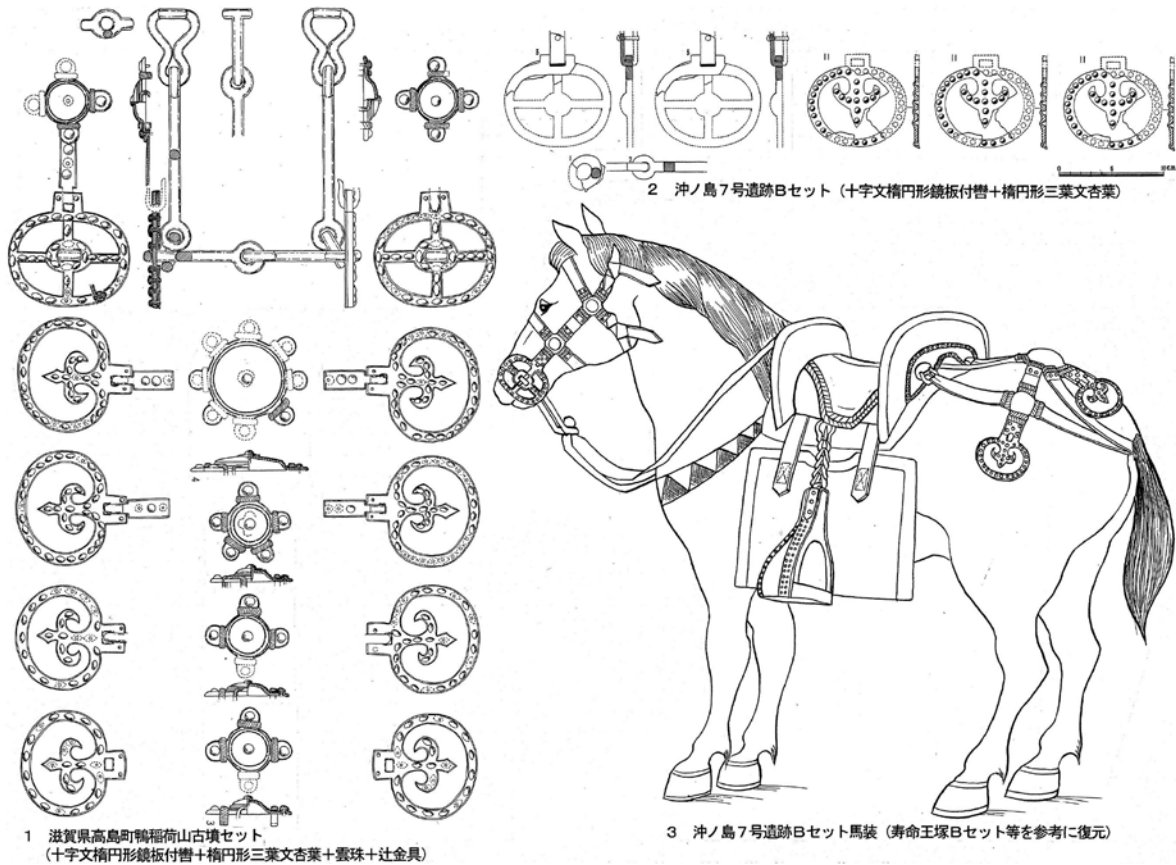
河内愛宕塚古墳では棘付f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉に伴って波状列点

文と隆起を伴う革帯金具が用いられている。棘付剣菱形杏葉は寿命王塚のものが著名だが、同形同大の杏葉が宗像沖ノ島で出土している点からすれば、沖ノ島出土の革帯金具も河内愛宕塚タイプの馬装の一部であったと推測される。

市尾墓山古墳では轡の形状が不明だが、異形剣菱形杏葉や鳥嘴形居木先飾金具とともに辻金具に鋌で鍛接した状態のものを含め革帯金具が七〇個体も出土している。なお市尾墓山は継体朝の大臣となった巨勢男人(五二九没)の墓とする見解(河上邦彦一九八四)がある一方、巨勢氏の台頭を七世紀以降とみて、市尾墓山を蘇我氏の祖の墓とする白石太一郎氏の見解(白石太一郎二〇一六)もある。同巧の沖ノ島Aセットは、継体二十三年に伽耶で軍事活動を行ない、翌年失政での帰路、対馬で没した近江毛野や、任那四県割譲問題に関わった穂積臣押山らも供献者の候補となる。

これに後続する藤ノ木古墳B組では、鐘形杏葉・鏡板に伴って合計五〇個以上というやはり異常に多数の革帯金具が使われており、鞍の覆輪構造や鳥嘴形居木先金具の共通などから、市尾墓山の系譜を引く馬装と考えられる。

よってこの種の革帯金具は、大伽耶系の鐘形・棘葉形意匠の馬具に伴って朝鮮半島から舶載され、大伽耶系馬具の構造を摂取した新式の金銅装f字鏡板・剣菱杏葉のセットに採用される一方、国産化された鐘形鏡板・杏葉や棘葉形鏡板・杏葉のセットにも継承されたと推定される。以上、朝鮮半島の帯金具類が、馬具の革帯金具類に取り込まれ、これが列島で模倣、定着していったと理解される。



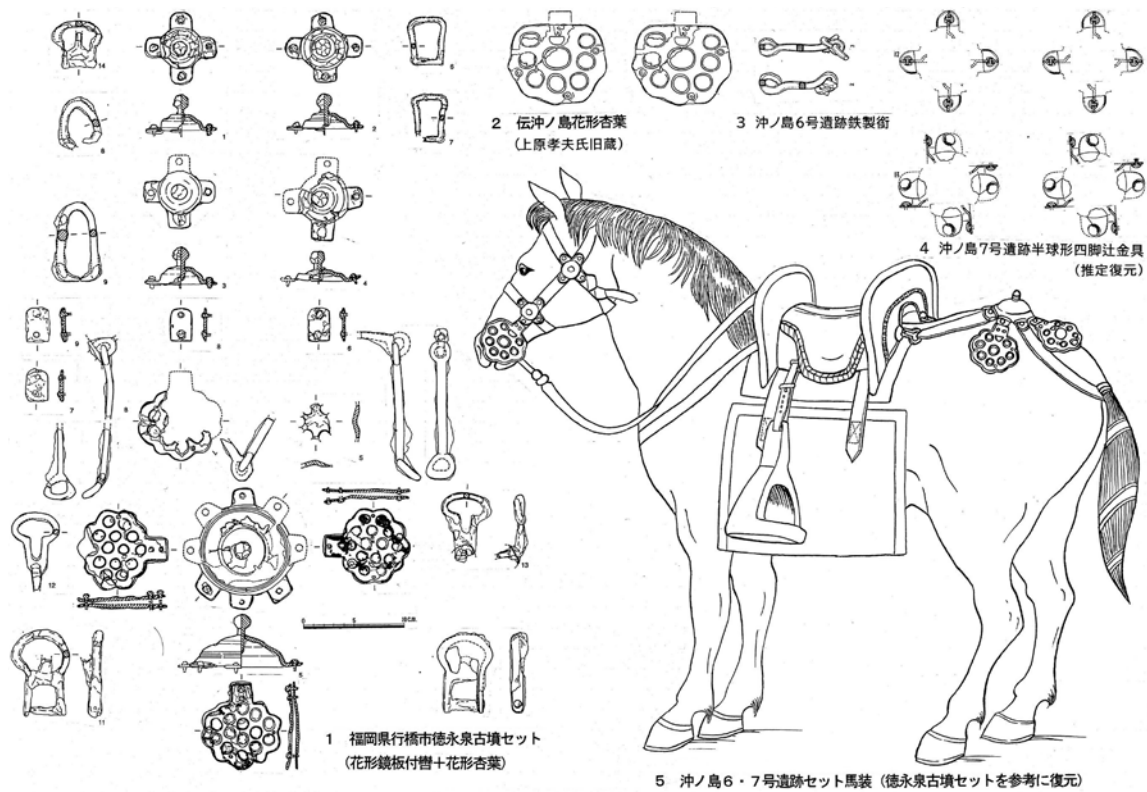
図四 沖ノ島7号遺跡 Bセット（十字文楕円形鏡板付轡+楕円形三葉文杏葉）

Bセット…(逸：楕円形十字文鏡板) + 楕円形三葉文杏葉 (図四)

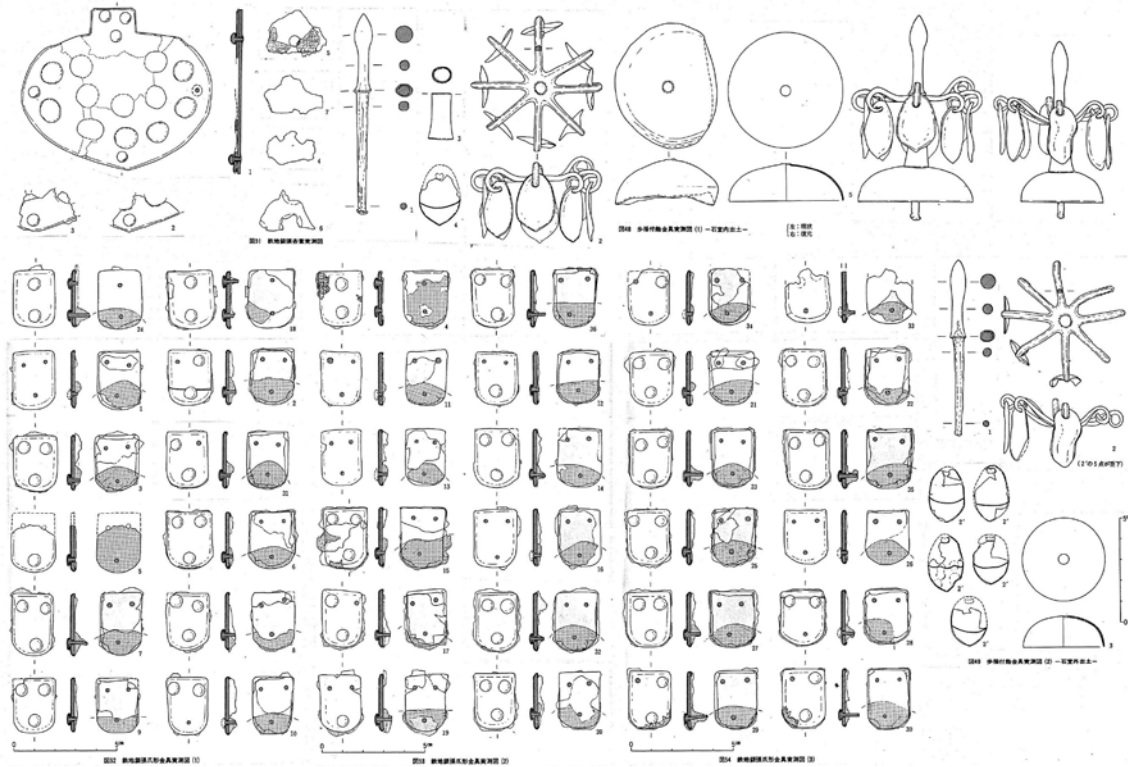
楕円形三葉文杏葉は、楕円形十字文鏡板付轡とセットをなし、滋賀県鴨稲荷山古墳や京都府物集女車塚古墳など、北摂を取り巻く琵琶湖・淀川水系に分布中心があり、奈良盆地に希薄な分布から、継体・安閑・宣化朝に關わる馬具と考えられる。ただし沖ノ島7号遺跡例は、三葉部に疑似鋌表現が施される点でやや特異である。

Cセット…(逸：花形鏡板) + 鉄製銜+辻金具+花形杏葉 (図五)

重住真紀子氏は上原孝夫氏蔵の伝沖ノ島出土花形杏葉を報告した(重住真紀子二〇〇五)が、報告された資料は遊離した花形鏡板の可能性も排除できない。花形鏡板・杏葉は、福島から熊本までの範囲に約四〇例が散在し、福岡県下には七例が集中し、上宮王家に奉仕した壬生部の分布と重なる。筆者の花形馬具編年では最終段階にあたるもので、輪郭の不明瞭化と珠文のくずれが著しく進行している(桃崎祐輔二〇一三)。この馬具が確実に沖ノ島出土品である場合、セットをなすと想定される部品がごく少量存在する。まず六号遺跡では、歩揺付雲珠・鉄製銜・蓋付銅鏡が出土した。このうち歩揺付雲珠は、半球座五本吊手で、七号遺跡で同型品が二〇点出土し、新羅系のFセットの一部が六号遺跡に持ち込まれたと考えられ除外する。これに対し鉄製銜は、国産の鏡板轡に伴う残欠と考える。さらに七号遺跡では、半球形に近い鉢形の本体に十字形に半円形脚四点がつく辻金具の小破片が出土し、花形馬具など古墳時代後後半〜終末期の国産馬具に伴って見いだされる規格品である。以上を踏まえ花形鏡板+杏葉+半球



図五 沖ノ島6・7号遺跡 Cセット (花形鏡板付轡鉄製銜?+花形杏葉+半球形四脚辻金具)

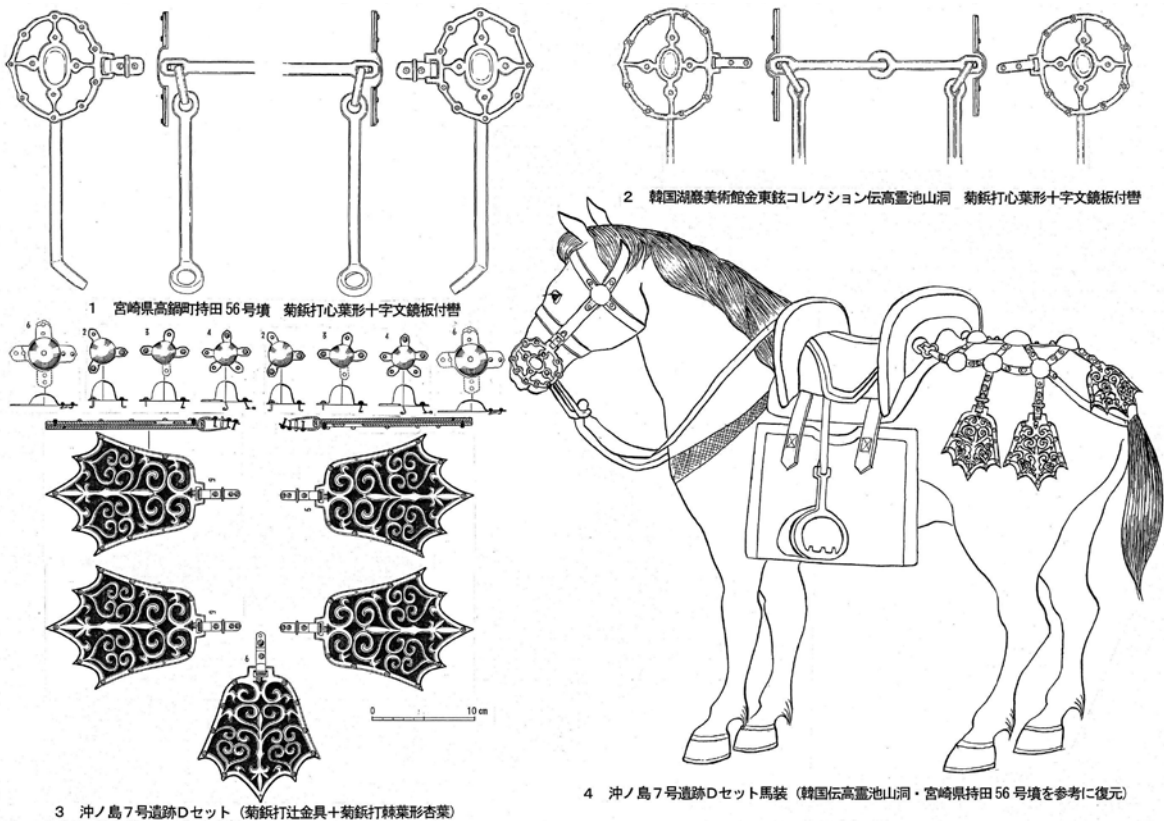


図六 千葉県成東町駄ノ塚古墳 心葉形連珠文杏葉・歩揺付雲珠セット

形四脚辻金具のセットを推定する。

福岡県行橋市徳永泉古墳では、花形鏡板付轡・杏葉が一セットのみ出土し、一对二点の花形鏡板を伴う轡、コハゼ形金具四点、頭絡に伴う刺金のない鉸具四点、鉢上に宝珠形飾のある四脚辻金具四点、鉢上に宝珠形飾のある、貴金具を伴わない八脚の雲珠一点、鞍に伴うシオデー対二点、木製壺鐙部品と考えられる大型の鉸具一对二点、腹帯の可能性のある大型鉸具徳永泉はD類だが、両者が近似する馬装であると仮定して復元を試みれば、一点からなる（行橋市教育委員会二〇〇二）。伝沖ノ島の花形馬具はA類、尻繫は、八脚雲珠のうち、両側と後方の三脚に三点の杏葉をT字形に配し、脚間の二脚から尻尾にかける帯をループ状に派生させたと推定できる。

なお千葉県駒ノ塚古墳の鏡板付轡・杏葉は、形状は心葉形だが、内区には連珠文を配し、花形馬具の亜種（キメラ）と考えられるため、国産と考えられるが、半球形歩揺付雲珠とセットである点が特異である（大久保奈奈一九九六）。これらの歩揺付半球形雲珠はやや大型で、沖ノ島八号遺跡出土の八点や群馬県綿貫観音山歩揺付雲珠のうち大型品四点と対比される。歩揺付雲珠の多くは一般的に舶載品と考えられているが、群馬県高崎市綿貫観音山古墳出土馬具の歩揺付雲珠のうちには、国産の櫛（サカキ）材を使用するものがあることが知られており（群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団一九九九）、国産の歩揺付雲珠の存在はほぼ確実にされる（諫早直人二〇二〇）。駄ノ塚古墳例を念頭に置けば、沖ノ島Cセットの花形馬具類が八号遺跡の歩揺付雲珠とセットをなす可能性も排除できないが、出土状態や通例からみてその可能性は低いと考える。



図七 沖ノ島7号遺跡 Dセット（菊鋳打心葉形十字文鏡板付轡+菊鋳打棘葉形杏葉）

二 船載馬具の検討

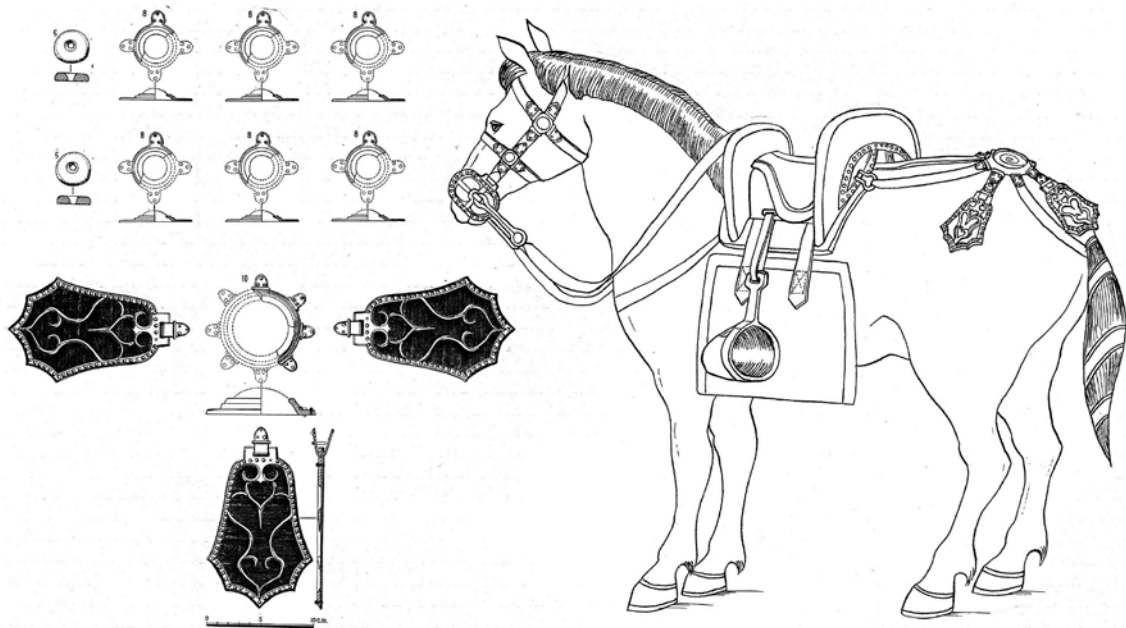
D セット…(逸…心葉形十字文鏡板付轡)・棘葉形杏葉A・菊鉞打辻金具

棘葉形杏葉Aは小一・大三の四点からなり、肩が張るが立間幅は極端に狭く、細長い吊金具には責金具を介して三点の菊鉞を打つ。裾が大きく広がり下縁が鋭く尖る五棘形の内部は雄渾な渦巻状のハート形唐草文で充填し、縁部に菊鉞一二点を打つ見事な出来栄である。金銅板をキャップ状に高く打ち出し、細い脚部に菊鉞を打つ小型辻金具とセットをなす。諫早直人氏によれば、扁平な菊形鉞の馬具は大伽耶製品の可能性が高いという。

以上を踏まえれば、Dセットは、細い吊鉤金具に菊形鉞を一列に打つ、細い立間で、心葉形輪郭の鏡板に、金銅製打出キャップ状銜留を心葉形十字形縁金を置いて、疎らな間隔で鉞留した鏡板付轡を伴っていた可能性が高く、その形状は、韓国湖巖美術館金東鉉コレクションの伝高霊池山洞出土の心葉形十字文透鏡板付轡+心葉形重圈三葉文杏葉セットの鏡板轡(湖巖美術館一九九七)に最も近く、また天理大学蔵の宮崎県高鍋町持田五六号墳出土の心葉形重圈十字文透鏡板付轡+心葉形重圈三葉文杏葉の吊鉤金具(宮代栄一九九五)を細く華奢にしたようなものであったと考えられ、その製作地は韓国慶尚北道高霊池山洞周辺、大伽耶国に求められる。またその馬装をみると、高霊池山洞は辻金具や雲珠に金銅板打出を多用するが、持田五六号は環状鉢部にイモガイを嵌入する構造であり、沖ノ島Dは、打出鉢に細い脚がつく小型辻金具が六点ほど出土しており、高霊池山洞に近い構造をとっていた可能性が高い。

E セット…(逸…心葉形十字文鏡板付轡) + 棘葉形杏葉B + イモガイ嵌入辻金具 + イモガイ嵌入環状雲珠

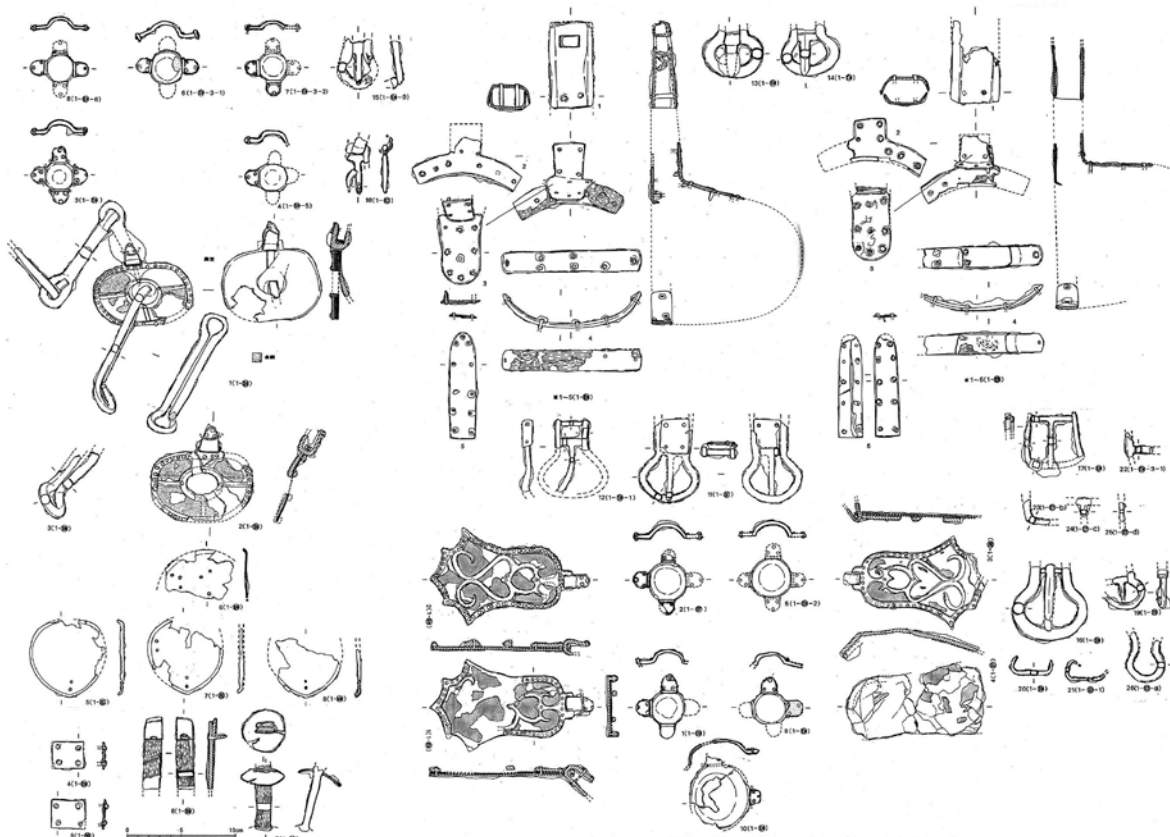
七号遺跡の棘葉形杏葉Bは、完形一点、文様板が剥離した破片一個体の二点が確認できるが総数は不明である。五棘輪郭で内区は上端から垂下する二股蕨手文の下にハート形を組み合わせた文様をあしらう。立間は小さく、細く短い舌状吊鉤金具に小鉞を三点打つ。類似する文様構成の棘葉形杏葉は慶州壺杆塚・昌寧桂城Ⅲ地区一号墳など六世紀前半の新羅古墳で出土しているため、新羅製と考えられるが、それより大型で、吊鉤金具の形状を含め六世紀中葉の慶州皇南里一五一号墳や固城松鶴洞一C号墳に近く、両者の中間に位置づけられる(桃崎祐輔二〇〇一・二〇〇二、二〇一四)。慶州鷄林路一四号墳では、三セットの馬具が出土しており(国立慶州博物館二〇一〇)、仮Aセットは、楕円形十字文鏡板付轡+心葉形透彫杏葉+棘葉形透彫ガラス嵌入杏葉+鉄地銀象嵌龍唐草文鞍+イモガイ嵌入四脚雲珠・辻金具+ガラス嵌入四脚雲珠・辻金具+木心鉄板張輪鏡、仮Bセットは棘葉形+鉢形四脚辻金具+鉢形六脚雲珠+鉄地銀象嵌龍文鞍+鉄製輪鏡、仮Cセットは鑢轡+イモガイ嵌入四脚辻金具+龍文覆輪付鬼面文鞍鞍+鉄製輪鏡からなると判断する。沖ノ島七号遺跡でも、イモガイが脱落したと考えられる環状四脚辻金具・六脚雲珠で、舌状脚に小鉞を三点打つものが複数出土しており、棘葉形杏葉Bとセットであったと類推できる。以上より、沖ノ島Eセットは、意匠は異なるものの、鷄林路一四号墳Aセットと部品の細部に共通点が多く、これに類する、二条線引手楕円形十字文鏡板付轡+棘葉杏葉+イモガイ嵌入四脚辻金具・六



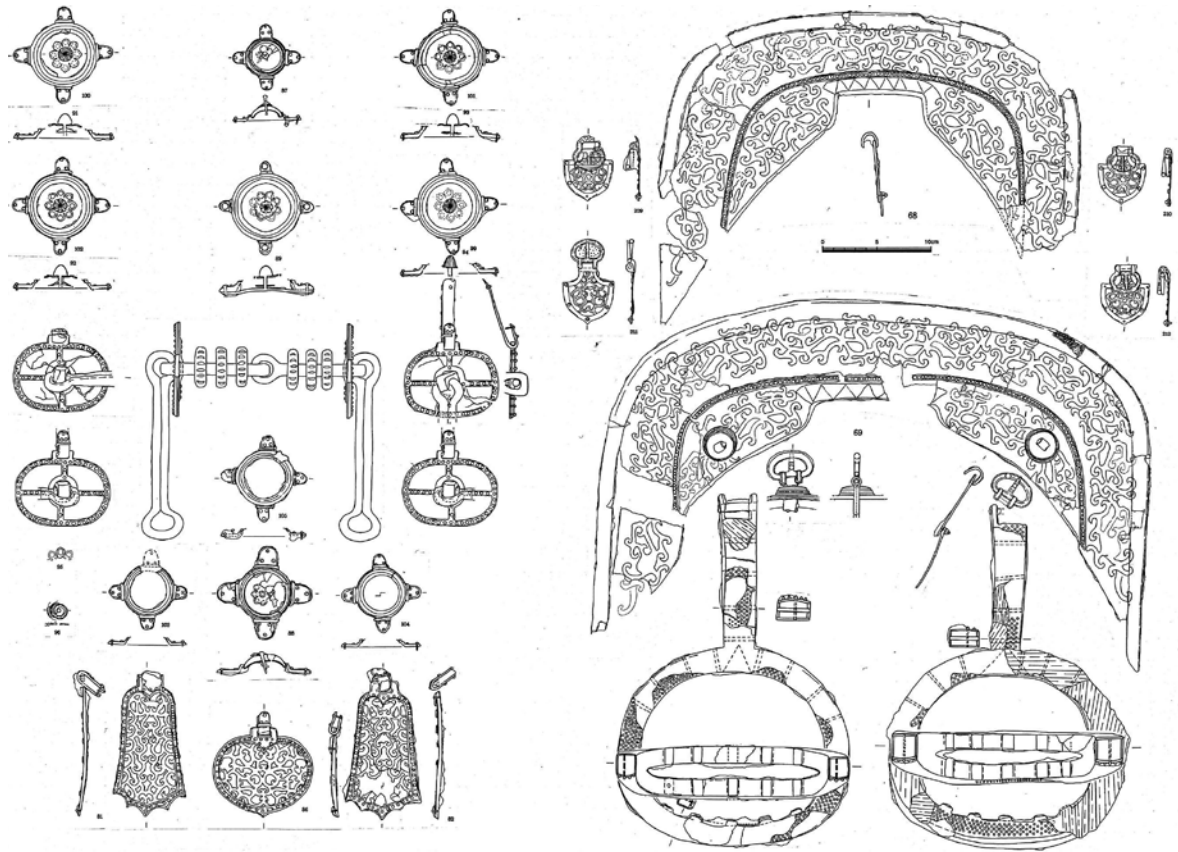
1 沖ノ島7号遺跡Eセット (棘葉形杏葉+イモガイ嵌入雲珠・辻金具)

2 沖ノ島7号遺跡Eセット馬装 (韓国慶州鷄林路14号墳Aセットを参考に復元)

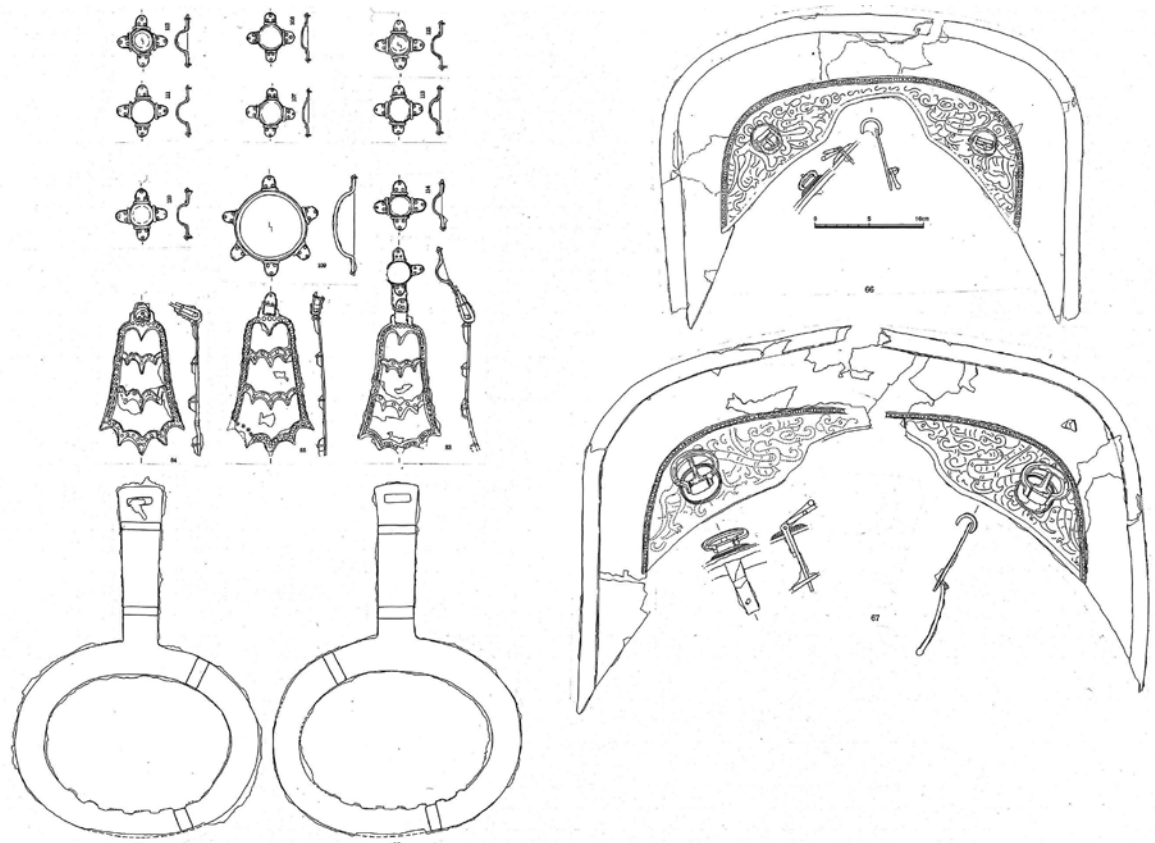
図八 沖ノ島7号遺跡 Eセット (楕円形十字文鏡板付轡+棘葉形杏葉+イモガイ嵌入雲珠・辻金具)



図九 韓国桂城區区1号墳セット (楕円形十字文鏡板付轡+棘葉形杏葉+鉢形雲珠・辻金具)



図十 韓国慶州鷄林路 14 号墳Aセット (楕円形十字文鏡板付響+棘葉形杏葉+ガラス・イモガイ嵌入雲珠・辻金具)



図十一 韓国慶州鷄林路 14 号墳Bセット (楕円形十字文鏡板付響?+棘葉形杏葉+鉢形雲珠・辻金具)

脚雲珠のセットが想定され、新羅慶州での製作が推定される。固城松鶴洞一C号墳（張允禎二〇〇五）も同様な構成だが、新羅製か伽耶製か判断に迷う。これに対し、鷄林路一四号墳Bセットのような鉢形辻金具や雲珠と組み合う例は昌寧桂城Ⅲ地区一四号墳（慶南考古学研究所・昌寧郡二〇〇二）に見られる。なお桃崎が先論（桃崎祐輔二〇一八b）でB5セットとしてカウントしていた文様板が剥落した棘葉形杏葉一点については、その後、七号遺跡の棘葉形杏葉Bと同一型式・法量と判断されたので、今回E（旧B2）セットに含めて解消する。

Fセット…（逸…金銅装楕円形十字文透彫鏡板付轡）十方円結合金具二十羽人唐草文杏葉五（実際は六点か八点）十円形座金具付鞍鞍二十菊形座十本吊手歩揺付雲珠四（実際は五〜六）十半球座六本吊手歩揺付雲珠一（実際は一二）十半球座五本吊手歩揺付雲珠二〇（実際は二二〜二四点）

七号遺跡西部の鉄製鞍に接して五点の羽人唐草文杏葉が出土した。ただこの地点には国産・舶載馬具が折り重なっており、羽人杏葉と鉄装鞍がセットか否かは判断が難しい。

羽人唐草文杏葉は地板・透彫板・縁金共に金銅製で、この三枚の金属板を一六個の笠鉾で留める。透彫板は人面に双翼・三尾翼を持った羽人と唐草文を組み合わせたもので、同一のデザインの表裏を利用して三枚は鳥人を右向き、二枚は左向きにしている。胸を張った鳥身に、双翼をつける肩が双方に張り出し、尾翼は二翼は後方、一翼は下向きに前方になびく。それ以外の鳥身を唐草文化し、他の空隙も唐草で埋めた結果、奇抜な隠文様

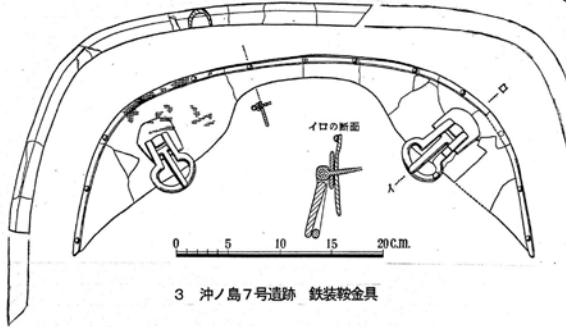
となっている。唐草を縁取るように二重の列点を打っているが、顔面と双翼・尾翼には蹴彫を施す。なお中国甘粛省の嘉峪関壁画墓では、羽人の顔面に赤い線で隈取りがされており、これを蹴り彫りで表現したのかもしれない（桃崎祐輔二〇一七）。吊鉤金具の半円部が幅広で、立聞孔部で狭まる杏葉は、高句麗に多く、新羅にも受容されている。宮崎県百塚原古墳群出土の心葉形唐草文透彫杏葉も同様な構造で、楕円形双龍紋鏡板付轡とセットをなし、新羅製と考えていたが、近年は大伽耶製との見解もある。七号遺跡で多数出土した歩揺付雲珠のうちには、菊形座金具のものが四点含まれるが、類例の多くは五〜六世紀の慶州新羅古墳から出土する。日本列島では六世紀後半の綿貫観音山古墳で、新羅製と思われる馬具セットに伴って歩揺付雲珠が数十点出土し、大部分は半球形座金具だが、菊形座金具も少数含む。宮代栄一氏の復元案によれば、楕円形十字文鏡板付轡とセットをなす尻繫は五列構成で、中央の三列に八点、左右両脇列に七点、二四十一四〓四八点を復元したが、心葉形C字文透彫杏葉は、花形飾の頭絡に組み合う別セットとみている（宮代栄二二〇一六）。これに対し諫早直人氏は、楕円形十字文鏡板付轡＋心葉形C字文透彫杏葉＋歩揺付雲珠＋鉄製壺鐙のセットを復元しており（諫早直人二〇二〇）、筆者もこれに従う。筆者の試案では、綿貫観音山古墳の玄室西側壁で一括出土した歩揺付雲珠がすべてBセットに伴い、尻繫を構成していた場合、それは図十三に示した一一列構成で、左右三列ずつ合計六列は八本吊手雲珠七点配置、中央五列は三本・六本吊手等の六点配置で、残った最後尾に六脚步揺付大型雲珠を伴うと考え、そこに二点、両側中央付近に各一点、合計三点の心葉形



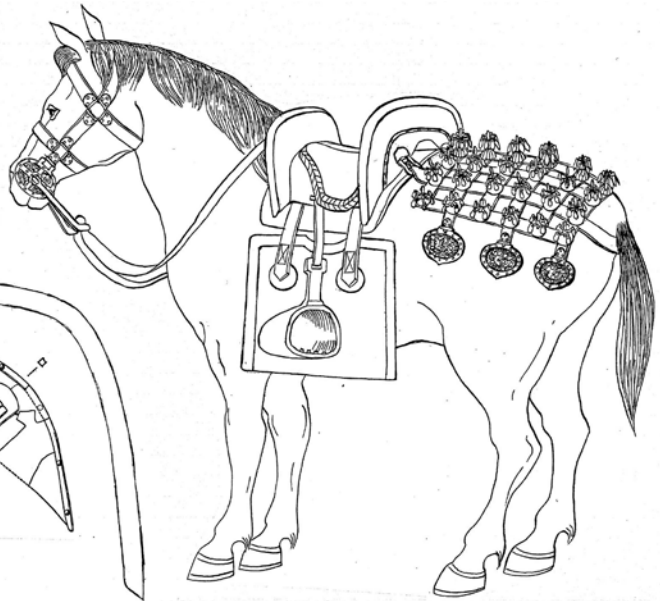
1 天理参考館（守屋美好旧蔵）楕円形十字文龍文透鏡板付轡



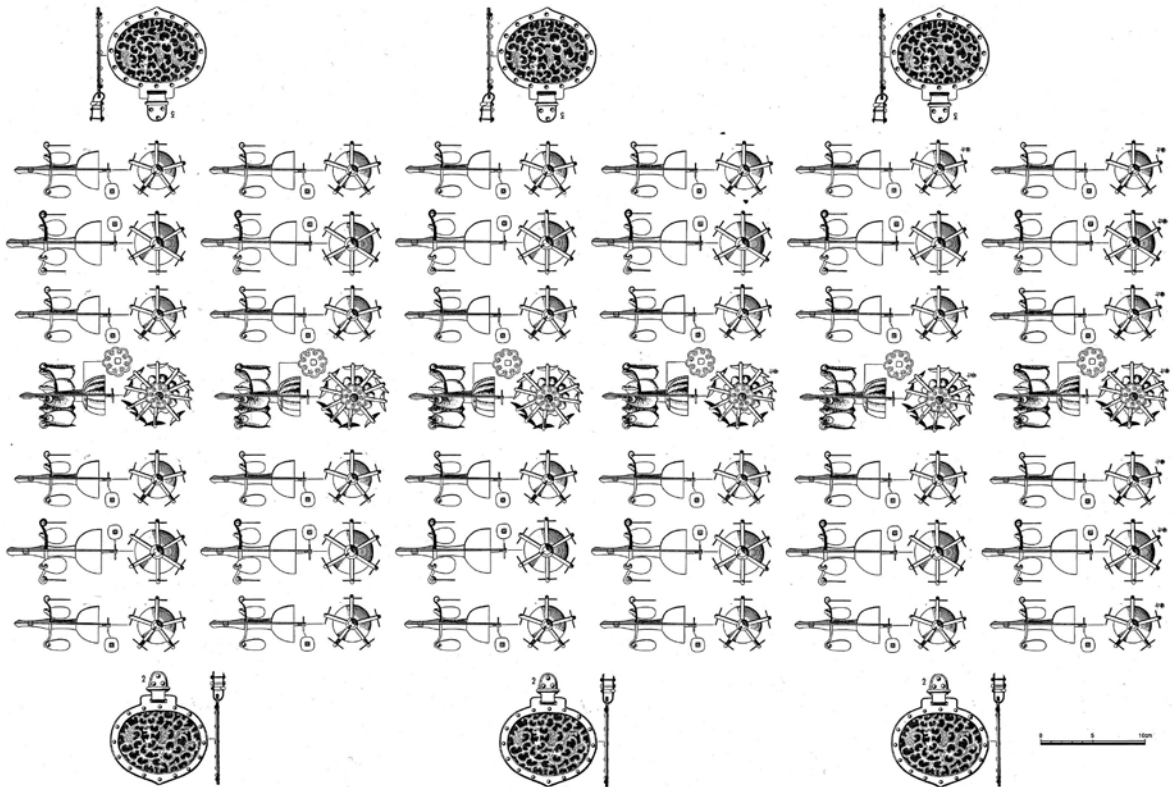
2 沖ノ島7号遺跡 方円結合金具



3 沖ノ島7号遺跡 鉄装鞍金具

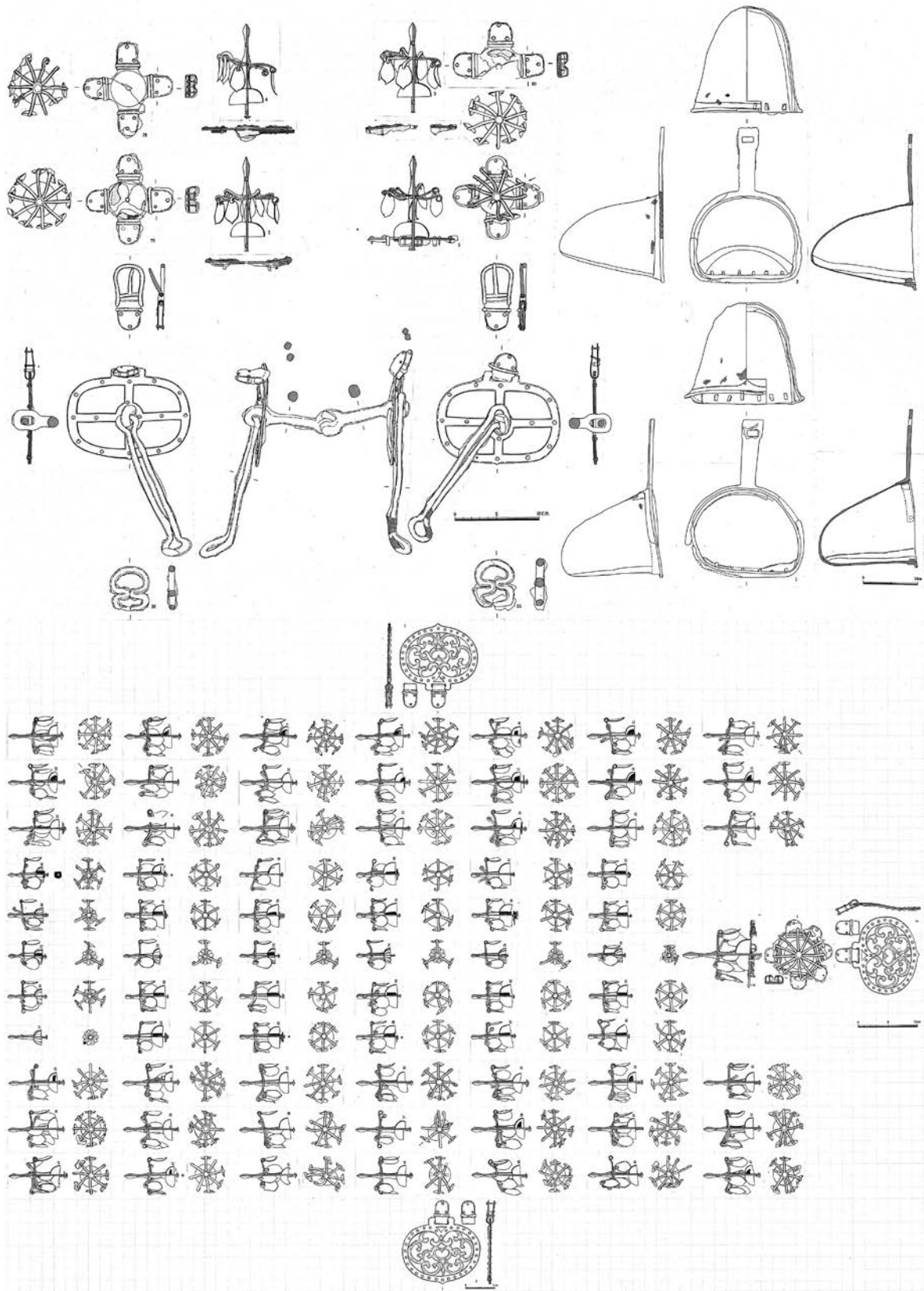


4 沖ノ島7号遺跡Fセット馬装（群馬県総貫観音山古墳Bセットを参考に復元）



5 沖ノ島7号遺跡Fセット尻繫（花形座歩揺付雲珠+半球座歩揺付雲珠+心葉形羽人文透彫杏葉+歩揺付雲珠）

図十二 沖ノ島7号遺跡 Fセット（楕円形十字文龍文透彫鏡板付轡?+心葉形羽人文透彫杏葉+歩揺付雲珠）



図十三 群馬県高崎市綿貫観音山古墳 Bセット (楕円形十字文鏡板付轡+心葉形C字文透彫杏葉+步揺付雲珠)

杏葉を吊るし、残った四点の十本吊手四脚辻金具は頭絡を構成していたと考える。

よって綿貫観音山Bセットの尻繫は七点×六列Ⅱ四二点、六点×五列Ⅱ三〇点、後方一点、合計七三点もの歩揺付雲珠から構成されると考える。以上、羽人唐草文杏葉と菊形座金具と歩揺付雲珠に加え、円形座金具を伴う金銅製鞍鞍金具一对、方円結合金具二点も同一セットと考える。調査で出土した歩揺付雲珠一類は七号遺跡で三五点、八号遺跡で八点、四号遺跡で二点、六号遺跡で一点、合計四五点が出土しているが、このうち七号遺跡の三五点は、本来はすべてB1セットを構成していたと考える。その内訳は、花形半球座十本吊手が四点（+四号遺跡の一点）半球座六本吊手が一点、半球座五本吊手が二〇点（+六号遺跡の一点）となり、これを六〜七点単位の五列構成と考える。

このうち花形半球座十本吊手が五点+ α 点で、尻繫の中央列を構成するとみて、半球座六本吊手が一点+ β でその2倍数、半球座五本吊手が二+ γ で四倍数とみれば、中央五+一+六、六本吊手六×二+二+五本吊手六×四+二四となり、六+一二+二四+四二点となり、そのうち七点が見失われたものが七号遺跡の歩揺付雲珠群と判断される。なおこれに伴う鏡板轡は逸失しているが、注目される対比資料がある。

天理参考館には梅原末治氏の調査で守屋美好氏の蔵品中より発見された出土地不詳馬具類がある。

このうち天理参考館登録番号三九・五〇の龍文透彫鏡板付轡は鉄地金銅張で、全体は横長の楕円形を呈し、上端に長方形の短い立間を作り出す。

鏡板本体の幅一・七cm、立間を含めた高さ九・四cm、立間の幅三・八cm、高さ一・〇cm。厚さ〇・五mmの鉄板に同形の薄い金銅板を重ねて台板とする。

その上に龍文を透彫りした厚さ約1mmの金銅製の文様板を置き、最後に銜受け部の楕円形縁と十字文を共造にした厚さ一・五mmの金銅製の縁金で押さえ銜留めする。銅製の笠銜は銜頭を鍍金する。銜は外周に一六個所、銜受け部の上下左右に4個所、それに外周と銜受け具をつなぐ左右の縁金にそれぞれ一個所の合計二二個所に打たれ、九個所が脱落している。中央に楕円形の銜通孔が穿たれ、長径一・九cm、短径一・四cmあり、銜留金具は失われている。立間孔に装着された鉤金具は、厚さ1mmほどの細長い金銅板で、一端を立間孔に通して裏側に折り曲げ、三銜と一条の責金具で面繫に固定される。先端は半月形を呈し、責金具でかき止める部分は両側面が僅かにくぼむ。鉤金具が立間孔をくぐる部分は両側面が切れ込み関をもつ。文様板に透彫りされた龍文はかなりデフォルメされ唐草文化している。一对の龍を向かい合わせ配置した左右対称の構図で、頭部には水滴形の眼を打ち抜き、開いた口中に三角形の突起で歯を表現する。頭部にはS字状に延びる角と、耳を表現したと見られる小さな突出部が作り出されている。胴体から延びる四肢はほとんど原形をとどめず、爪等の細部表現も完全に省略されている。文様に沿って細かい列点文を刻んで縁取りする。文様表現は稚拙であるが、複雑な構造の優品である（高野政昭一九九〇）。

守屋美好氏旧蔵の天理参考館蔵品は、①地板鉄板+サンドイッチ金銅板+蕨手状唐草文透文様板（糸鋸による銅板切り抜き鍍金）+十字文縁金銜留からなるが、銜通孔は縦長の楕円形である。注目されるのは、立間・吊

鉤金具・鋌の特徴が、沖ノ島七号遺跡の羽人文透彫杏葉を想起させる点である。よって沖ノ島七号遺跡の杏葉類は、天理参考館蔵品のような鏡板付轡とセットであったと考えられるだけでなく、守屋美好氏旧蔵品に、沖ノ島七号遺跡から持ち出された遺物を含む可能性も検討する必要がある。

十字文縁金に縦長楕円形の衝通孔を持つ構成は、新羅慶州皇吾里一六号墳一榔出土の鏡板轡と、これとセットの心葉形十字文杏葉に見られる構成で、六世紀代の新羅慶州の製品と考える。群馬県綿貫観音山古墳の鏡板付轡は法量が巨大だが、一枚被せの十字文楕円形鏡板轡に鉄製二条線引手を伴う点が共通し、新羅系と判断される。これに伴う大型の心葉形C字文透彫は、扁平な銅板を垂直に切り抜き猪目形などの単純な透彫を施したもので、透彫板の輪郭に沿って列点文の加飾を施す点が共通する。ただ諫早直人氏が指摘（諫早直人二〇二一）するように、これらと組み合う歩揺付雲珠の半球形部の内部に残る木質は、樹種鑑定でサカキと判定されている（群馬県教育委員会・財群馬県埋蔵文化財調査事業団一九九九）。サカキは日本固有種とみられるから、綿貫観音山Bセットは新羅系だが新羅製ではなく倭製品の可能性が残る。なお共伴した銅水瓶は、北斉庫狄廻洛墓（五六二）や北斉崔浩墓（五六五）の明器水瓶に類似し、六世紀第3四半期前後の北斉製品と考えられるため、五六四・五六五・五七二年に北斉に遣使した新羅が、五六六年の皇龍寺竣工にあわせて北朝製仏具を入手し、自国産の馬具と組み合わせ、倭国に贈った「舶載品ラッシュ」時の遺物で、所謂「新羅の調」に該当する可能性が考えられる。TK四三型式の須恵器を伴う点から、副葬は六世紀第4四半世紀となる。

Gセット…(逸…心葉形十字忍冬文透彫鏡板付轡) + (逸…心葉形十字忍冬文透彫鏡板付轡) + 心葉形鉸具障泥金具 + 環状雲珠 (イモガイ嵌入か) + 透彫帯先金具 + 歩揺付雲珠

七号遺跡中央南寄りでは金銅装透彫帯先金具・歩揺付雲珠が集中して出土した。透彫帯先金具の細工は非常に精巧で、コンマ形・屈曲した杼形・猪目形を組み合わせた透彫りの下に玉虫羽・雲母板を挟み、鋌留する。杼形透から雲母、猪目形透から玉虫が覗く、凝った意匠である。一端に帆立貝形の鉸具がつくもの二点と、小型の爪先形裝飾吊鉤金具を伴う八点の二種からなる。これらには漢字で通番の刻印が刻まれている。

類例は極めて稀で、奈良県斑鳩町藤ノ木古墳Aセット馬具の構成部品に屈曲した杼形を連続透彫する例がある。

このような帯先金具は、端部に付いている爪先形吊鉤金具と本体を蝶番で連結する手法の共通からみて、朝鮮半島南部で出土する「樓岩里型帯金具」の形状を応用して製作されていると判断される。

畏友李漢祥氏の研究によって、新羅・百済の帯金具は、六世紀のものが樓岩里型（李漢祥一九九六）、七世紀のものが皇龍寺型（李漢祥一九九九）に分類・編年されており、その成果を踏まえ、対比を試みたい。

加賀狐山古墳は韓国昌寧桂城Ⅲ地区一号墳のような樓岩里型帯金具古段階に相当する一方、沖ノ島7号や藤ノ木古墳Aセットの透彫帯先金具の形状は、樓岩里型帯金具でも新段階の銚板・蛇尾と一致する。

樓岩里第一・二段階は刺金付鉸具を伴うのに対し、3段階以降には鉸具が無刺金化し、さらに四段階には逆心葉形銚板が消滅し方形銚板に変化する。

る。藤ノ木古墳や沖ノ島の馬具に組み合う帯先金具については、取り付けられた鉸具、鞍の鞍鉸具がいずれも刺金を伴っており、また鞍金具が逆心葉形鉸具と形状が一致する点から樓岩里一・二段階に併行し、六世紀後半～末の新羅帯金具と併行関係に置くことができる。

東京国立博物館小倉コレクション五五番は出土地不祥の樓岩里型帯金具で、Ⅲ類四段階に相当する。歪んだ無刺金鉸具付の銜帯とセットをなす短い蛇尾からなる。鉸具の形状は、百濟・陵山里三六号墳の出土品に類似する。銜帯には薄肉彫崩し技法で、三山文・忍冬唐草文透を表現する。また蛇尾にも忍冬唐草文透があるほか、長方形の一端を半円形輪郭とし、これを鱗状に重ねた意匠を表現する。透彫の忍冬唐草意匠は、静岡県賤機山古墳棘葉形杏葉の内区文様と全く同一であり、長方形鱗状輪郭も賤機山鏡板・杏葉の吊鉤金具と類似し、五五番帯金具と賤機山Aセット馬具は同一工房で、同時期に製作されたと考えられ、それは新羅慶州であったと推定する(桃崎祐輔二〇一八a)。

しかし公州陵山里三六号墳との輪郭の類似は、百濟製の可能性も示す。五五番帯金具の銜帯先端部に表現された三山状輪郭の透彫は、宮地嶽古墳の鏡板吊鉤金具先端に表現された三山形に通じている。また蛇尾の長方形鱗状表現は、壱岐笹塚の鏡板・杏葉の立聞吊鉤金具・辻金具・雲珠脚に表現された、肋のある帆立貝状の成形や、亀形金具脚部の四指表現にも通じている。

李漢祥編年で樓岩里型Ⅲ類四段階の伝慶州出土の帯金具類は、無刺金鉸具付の銜帯とセットをなす蛇尾に唐草文を透彫した裝飾板を挟み込んでい

る。方形板の互違い鉤手文は、高茶屋大塚や堀之内D・一三号の雲珠の透彫金具に通じ、さらに類似する意匠は、慶州皇龍寺や昌寧末屹里遺跡窖藏出土の裝飾金具類にも見られる。

樓岩里型帯金具は法興王代(五一四～五四〇)の律令頒布(五三〇年頃?)に出現し眞徳王代の唐式衣制への転換(六四九)によって皇龍寺型に移行すると思われる。すると四段階は六四五年を下限とする七世紀前半に位置付けられ、小倉コレクション五五番が六世紀末～七世紀初頭、伝慶州出土品が七世紀前半となり、これらと対比される馬具類も帯金具と同時期となる。

壱岐笹塚古墳では、鉸具にコハゼ形の金具がつき、忍冬文を浮彫し、五銕を打つ銜帯と、長方形に忍冬文を浮彫する蛇尾?が出土している。皇龍寺型帯金具の最古段階にあたり、慶州皇龍寺、金海礼安里四九号墳例と対比される。なお、崔正凡氏の「所謂皇龍寺型裝飾具の再検討」では、皇龍寺型帯金具の成立に、北朝・隋唐帯金具の影響を豊富な事例をあげて論証した(崔正凡二〇一八)。崔正凡氏の論を踏まえれば、樓岩里型帯金具についても、本来の範型は中国北朝にあり、その模倣形が北齊・北周に遣使朝貢していた新羅・百濟で製作されたと考えざるべきであろう。特に廃仏で知られる北周武帝孝陵ではパルメット文の金銅製帯金具が出土しており、樓岩里型の祖型と考えられる。

藤ノ木古墳に匹敵する金銅装透彫帯先金具を複数持つ沖ノ島セットは、当然類似する馬装であったと推定できる。そこでどうかぶのが、藤ノ木の鉸具付心葉形障泥金具と酷似する、沖ノ島七号遺跡の鉸具付心葉形障泥金具

である。この障泥金具も、当然セットであった可能性が高い。

これらの部品と組み合う鏡板付轡・杏葉は、同種馬具では頂点に位置する精品であったはずで、そのような可能性が考えられる既知の出土地不詳資料に、伊勢神宮徴古館の藏品群がある。

神職で古玩癖のあった江藤正澄は明治二一年に沖ノ島の遺物の一部を持ち出している。江藤の膨大なコレクションの一部優品は、明治二九年に伊勢神宮徴古館に寄付された。よって伊勢神宮徴古館蔵の出土地不詳品のかなには、沖ノ島から持ち出されたものを含む可能性がある。なかでも心葉形十字文忍冬文透鏡板の残欠は、後藤守一氏の紹介以降、現在も徴古館にあるのか否か定かではないが、藤ノ木タイプの鏡板である。

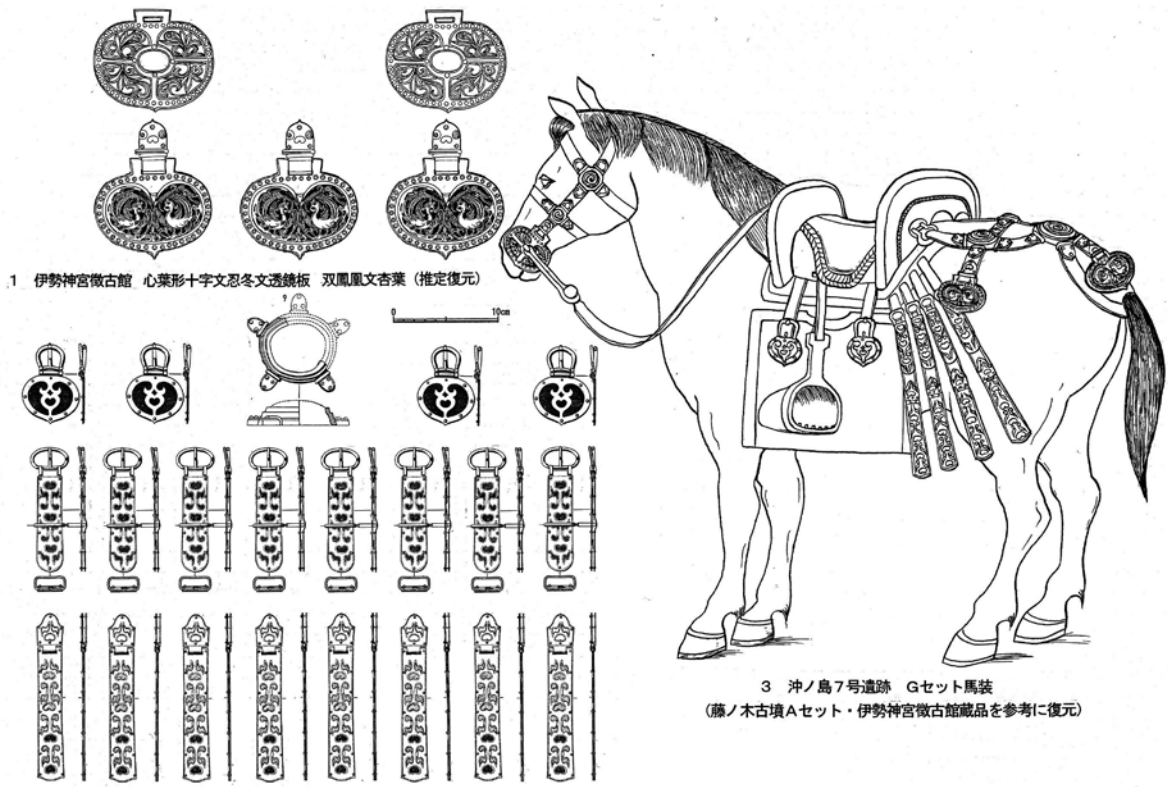
また心葉形双鳳凰文杏葉の文様板残欠は、藤ノ木古墳出土棘葉形杏葉に表現された双鳳凰文と同一意匠だが、より精巧な出来とされ、これらのセットがもし沖ノ島出土品であったならば、帯先金具と組み合う可能性が十分にある。また帯先金具の猪目透からみて、これに組み合う鏡板や杏葉には、藤ノ木古墳の心葉形十字文忍冬文透鏡板・棘葉形双鳳凰文杏葉や、岐阜県ふな塚古墳の龍文杏葉のように猪目透のある吊鉤金具が伴っていた可能性が高いと考えるが、この想定を裏付けるものか、七号遺跡の心葉形杏葉のように心葉形透のある爪形金具が存在する。そこで伊勢神宮徴古館藏品文様板に縁金と猪目透吊金具を補ったような杏葉を想定して組み合わせた。

なお伊勢神宮御神宝である鶴斑毛御彫馬（つるぶちげのおんえりま）は、檜材で馬体を彫刻し、そこに生糸のタテガミや尾を埋め込み、今は絶滅し

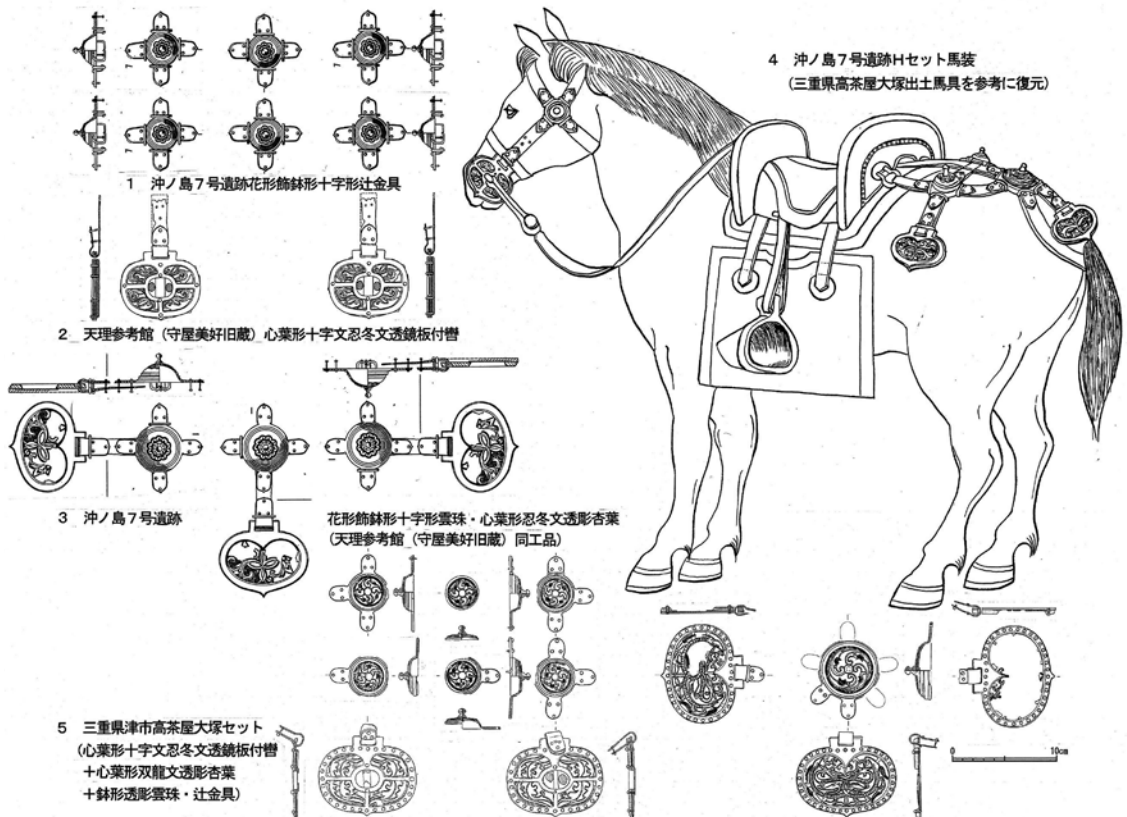
た鶴斑色といわれる毛並を彩色表現した精巧な飾馬の模型で、これに装着された唐鞍装には、鞍の後輪の部分に左右五本ずつ、合計一〇本の「八子（はね）」と呼ばれる短冊状の飾帯が懸垂され、それぞれ先端には金銅鈴が吊るされている。透彫帯先金具は、この「八子」に相当する者であったと考える。またこの馬の模型には、顎下に垂飾付の玉状の飾りが垂らされているが、これは中国で頸総と呼ばれるもので、伝沖ノ島出土の龍文透彫香炉状品は頸総であった可能性が市元墨氏によって指摘されている（市元墨二〇一六）。

歩揺付雲珠は七点分以上がまとまって出土し、半球形座金具上に五〇八枝を派生させ花弁状の歩揺を垂らす。群馬県綿貫観音山古墳や高句麗丸都山城で類品が出土している。

以上、Gセットは、心葉形十字文忍冬文透鏡板＋金銅透彫杏葉＋金属装鞍＋金銅装帯先金具＋金銅装歩揺付雲珠などからなる藤ノ木古墳Aセットに匹敵する豪華な新羅製馬具セットであったと推定される。この種の馬具は北部九州の分布頻度が異常に高く、福岡県の八セット以上を筆頭に北部九州に偏在する。『日本書紀』には「新羅の調」の用語が見え、六〜七世紀の新羅から倭国への贈答品とみられ、六世紀後半に集中する舶載金銅装馬具類をその具体的遺物とみる見解もある。しかし北部九州の偏在例は、倭王権からの二次的な分配とは考えにくい。外交使節の迎接にあたる北部九州の沿岸首長には、王権宛とは別に、豪華な馬具などを贈られる役得があったと考えられる。



図十四 沖ノ島7号遺跡 Gセット (楕円形十字文忍冬文透彫鏡板付轡?+心葉形龍文透杏葉+透彫帯先金具)



図十五 沖ノ島7号遺跡 Hセット (楕円形十字文忍冬文透彫鏡板付轡?+心葉形忍冬文透彫杏葉+花形飾雲珠・辻金具)

Hセット…(心葉形十字文忍冬文透鏡板付轡)・十字形雲珠付心葉形忍冬文透杏葉・十字形辻金具

沖ノ島社務所には、十弁花状飾を伴う十字形雲珠に心葉形忍冬文透杏葉を懸垂したものが保管されていた。七号遺跡では八弁花状飾を伴い、脚部が花弁状で三銚を打つ同巧の十字形辻金具が出土し、本来は七号遺跡の供献品と考えられる。縁部に銚打ちがない点が特異だが、埋め殺し銚であろう。

同様な構造のセットは、広島県二塚・壹岐笹塚・兵庫県升田山一五号墳、三重県高茶屋大塚・山梨県古柳塚・韓国昌寧末吃里退蔵遺構出土品(慶南考古学研究所二〇〇五)にみられ、新羅で七世紀前半～中葉に製作された可能性が高い(桃崎祐輔二〇一八)。

なお、天理大学・天理教道友社編一九八八『ひとものこころ』第二期第三卷一三九頁、「二〇七 馬の飾り金具 鉄地金銅装杏葉 幅八・七cm、出土地不詳 七世紀」は、二二七頁の解説によれば、「忍冬唐草文を透かし彫りにしたハート形の金銅板に、厚さ五mmの金銅製の縁金を重ねて、裏面から銚留めする。銚は上下左右の四カ所に打ち、表面からは見えない。現在では文様板も痕跡をとどめる程度で、文様板の裏に台板があったかどうか不明だが、類例からみてもおそらく鉄地金銅張の台板がつくものであろう。縁金の上部には、横長方形の立間を作り出している。立間には先端を花弁形に表した鉤金具が付く。No.二〇二の鉤金具と同様に、革帯の裏に沿う金銅板が長い。

透彫心葉形杏葉は、一般に透彫心葉形鏡板付轡と組み合うものとされている。掲出の杏葉は、No.二〇二の透かし彫り文様や、鉤金具の形態に類似

しており、セットになる可能性が高い。福岡県沖ノ島遺跡からは、同じ作りの杏葉が辻金具に装着された状態で出土している。沖ノ島の例は輸入品である(高野)。」とある。

高野氏が解説された通り、この杏葉は、Hセットの十字形雲珠付杏葉と全く同形で、心葉形内区に残る蕨手状の透彫からみて、沖ノ島杏葉と同工品の可能性が高い。ではセットになる可能性が高いとされるNo.二〇二はどうか。

天理大学・天理教道友社編一九八八『ひとものこころ』第二期第三卷一三六頁、「二〇二 轡金具 鉄地金銅装鏡 現長一一・五cm 出土地不詳 六・七世紀」掲載馬具について、二二六頁の解説によれば、

「鉄地金銅張製。楕円形に近いハート形の鉄板に薄い金銅板を張り、その上に透かし彫りの文様板を置き、十字の枠を共作りにした厚手の金銅製の縁金を銚留めする。銚は金銅製で縁金の上下左右に四本、銜受け部の上下に二本打つ。文様は忍冬唐草文を表し、細い沈線で縁取りした後、その中に列点文を刻むという、極めて装飾性の高いものである。立間には金銅製の鉤金具が付く。鉤金具は先端が花弁形をなし、立間孔を通った他端は裏側へ長く伸びる。鉤金具は、金銅製の銚で革帯に固定される。もとは銚の直下に責金具が取り付けられていた。鏡板の中央には鉄製の銜と引手が銚着しているが、この種の鏡板の例からみて、引手は二条線づくりと呼ばれる、一本の棒状の金属を折り曲げ両端に環をつくるものであろう。

透彫心葉形鏡板が製作された時期は、六世紀末から七世紀の前半とされ、古墳時代の馬具の中では新しい時期に属する。福岡県宮地嶽古墳、奈良県

珠城山三号墳の例など、同類の鏡板には輸入品が多く、本例もそれらに匹敵する優品である（高野）。」（天理大学・天理教道友社一九八八）

本資料について高野氏は「天理参考館登録番号三九一四九の心葉形十字文忍冬文龍文透彫鏡板付轡は鉄地金銅張で、上部に梯形の短い立間を作り出す。鏡板本体の幅七・七cm、立間を含めた高さ六・七cm、立間の幅三・二cm、高さ〇・九cm。銅製の笠鉾は鉾頭を鍍金する。鉾は外周に四個所、銜受け部の上下に二個所の合計六箇所に打たれている。中央にやや横長の円形に近い銜通孔が穿たれる。文様板に透彫りされた忍冬文はかなりデフォルメされ列点を施す」 「なおこの轡の立間には厚い銅板製の吊鉤金具がつき、鏡板を含めた残存長は一・五cmにも達するが、沖ノ島B7セットの十字形辻金具の脚部の鉾間隔と全く一致し重なる可能性がある。」と述べている。

結語

以上、沖ノ島祭祀遺跡には、最低でも国産三セット、舶載五セット、合計八セット前後の豪華な金銅装馬具が供献されていたことが確実視され、更に一〜二セット加算される可能性があるが、実用的な鉄製馬具は見当たらない。これは壱岐島の古墳で豪華な金銅装馬具とともに実用鉄な鉄製馬具が出土しているのとは対照的である。

また沖ノ島祭祀遺跡の馬具類は、完存するセットがない。長年にわたり風雨に晒され、海鳥による二次的移動を受けたのみならず、江戸時代乃至

それ以前から、多くの部品が持ち出されたと推定される。

本検討の結果、伊勢神宮徴古館蔵品のうち、心葉形十字文忍冬透鏡板や心葉形双鳳凰文杏葉文様板は、斑鳩藤ノ木古墳Aセットに準ずる内容で、沖ノ島七号遺跡Gセットの金銅装透彫帯先金具と一具でもおかしくない。徴古館の明治二十二年江藤正澄寄贈品に、沖ノ島出土馬具を含んでいる可能性がある。

また天理参考館蔵守屋美好氏旧蔵品には、沖ノ島七号遺跡Fセットの心葉形羽人文杏葉と製作技法・意匠・鉾間隔が類似する楕円形十字文双龍文透彫鏡板が含まれているほか、沖ノ島七号遺跡Hセットと同一の心葉形忍冬文透杏葉一点、およびHセットと一具でもおかしくない心葉形十字文忍冬透鏡板鏡板轡を含んでいる（註3）。

沖ノ島出土馬具のうち、子持剣菱形杏葉を含むAセットや、三葉文杏葉を含むBセットは、大伽耶系の馬具構造を撰取した国産馬具であり、六世紀中葉前後の遺品で年代上限を示し、国産の花形馬具を含むCセットや新羅製の十字形雲珠付心葉形忍冬文杏葉を含むHセットは同種馬具中の最新型式を示し、七世紀中葉を下限とする。

また龍文透彫香炉状品は、飾馬の首下に吊るす頸総の可能性があり、朝鮮半島でも類例が僅少であることから、金銅龍頭形金具やサングラスなどと共に、中国北朝もしくは隋・初唐前後の中国から舶載された可能性がある。

以上、沖ノ島出土の馬具類は、継体・欽明朝から、舒明・皇極朝の間に供献されたとみられ、糟屋屯倉設置（五二九）、那津官家設置（五三六）、

任那四県割讓(五四〇)、新羅・任那の調(五六〇)六四六)、征新羅軍(五九一
六〇三)、遣隋使(六〇〇)六一八)、遣唐使(六三〇)間の対外交渉
にかかる渡海に際し、航海安全等を祈願して奉獻されたと推定される。出
土状況からみて、飾馬ではなく、馬具一式を木馬等に載せて供獻したと想
像する。

本論の沖ノ島馬具の馬装復元は、大きく欠損する部品を憶測で補ったも
のも多く、粗案の域を出ない。今後、沖ノ島遺物の再調査、並びに散逸資
料の追跡によって検証を重ね、補正を重ねる必要がある。諸賢のご叱正を
乞う。

(福岡大学教授)

註

註1 守屋美好(もりやみよし)

守屋孝蔵の子息。その所蔵品中より梅原末治氏に見いだされた金銅装馬具類が天
理参考館に収蔵された。

註2 守屋孝蔵(もりやこうぞう 一八七六―一九五三)

宮城県出身で京都で活躍した弁護士。守屋氏の収集品のうち、古写経二六八件、
宸翰(天皇の書)八件が一九五四年に京都国立博物館に寄贈され、『守屋孝蔵氏
蒐集 古経図録』が一九六四年に出版された。また京都国立博物館蔵の中国の古
鏡は、守屋氏二女の赤星薫氏から昭和三〇年に寄贈を受けた漢鏡・隋唐鏡約五〇
面、昭和三三年に他の相続者から購入した方格規矩鏡約五〇面の、計一〇〇余面
で、守屋氏蔵鏡のほぼ四分の一にあたる。

註3 天理参考館蔵の守屋美好氏旧蔵資料については、天理参考館の藤原郁代氏に
メールで多くのご教示を仰ぎ、また鮮明な写真を提供いただいた。記して御礼申
し上げる。

引用参考文献

日本文献

- 阿久津久一九六九『中村古墳群発掘調査報告』兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会
諫早直人二〇二二「3. 九州出土の馬具と朝鮮半島」『第一五回 九州前方後円墳研究
会 北九州大会発表要旨・資料集 沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』pp.89-121.
pp.348-359
諫早直人二〇一三「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』岡内三眞編 同成社
pp.348-359
諫早直人二〇一三「統一新羅時代の轡製作」『文化財学の新天地』奈良文化財研究
所 吉川弘文館 pp.991-1012
諫早直人二〇二〇「綿貫観音山古墳出土馬具の系譜と製作地」『国宝決定記念 第
一〇一回企画展 綿貫観音山古墳のすべて』群馬県立歴史博物館 pp.198-207.
市元壘二〇一六「金銅製香炉状品の再検討」『宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州国博
物館 pp.116-117
梅原末治・小林行雄編一九三九『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』(京都帝国大学文学
部考古学研究报告第二五冊)
大久保奈奈一九九六「歩揺付飾金具の系譜」『東国における古墳の終末(附編)千
葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第六五集
pp.231-250

岡村秀典二〇〇七「伝沖ノ島出土の透彫り金具について」『日中交流の考古学』茂木雅博編 同成社

岡本健一編一九九七『將軍山古墳《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》—史跡等活用特別事業—確認調査編・付編』埼玉県教育委員会

小野山節一九七九「鐘形裝飾付馬具とその分布」『MUSEUM』三三九 東京国立博物館 pp.415

小野山節一九九〇「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑 第一巻古代上』日本中央競馬会・吉川弘文館 pp.1-32

鏡山猛・原田大六・坂本経堯・渡辺正気・嶺正男・仙波喜美雄一九五八『沖ノ島』吉川弘文館

河上邦彦一九八四『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告書第五冊 高取町教育委員会

京都帝國大學一九三九『筑前嘉穂郡王塚裝飾古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十五冊

埼玉県教育委員会一九九七『將軍山古墳 史跡埼玉古墳群整備事業報告書 確認調査編・付編』

重住真貴子二〇〇五「上原孝夫氏所藏沖ノ島出土品について」『宗像大社神宝館館報』No.2 宗像大社文化財管理事務所

柴田常恵一九二七「沖ノ島御金藏」『中央史談』第十三卷第四号

白石太一郎二〇一六「古墳からみた大王と豪族—六世紀の大和と河内を中心に—」『大王と豪族—六世紀の大和と河内—』大阪府立近つ飛鳥博物館 平成二八年度 秋季特別展図録 pp.8-18

神啓崇二〇一七「擬似銕を施す馬具」『アーキオ・クレイオ (Archaeo-Clio)』第一四号

神啓崇・西幸子・桃崎祐輔二〇一八「岩戸山古墳石馬の馬装研究」『古文化談叢』第八一集 九州古文化研究会 pp.51-78

第三次沖ノ島學術調査隊一九七九『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会

高槻市立今城塚古代歴史館二〇一六『継体大王と筑紫君磐井』今城塚古代歴史館開館五周年記念特別展

高野政昭一九九〇「【資料紹介】天理参考館所蔵の透彫心葉形鏡板について」『天理参考館報』第三号 天理大学出版部 pp.48-53

高野政昭一九九一「天理参考館所蔵の竜文透彫り鏡板について」『天理参考館報』第六号 天理大学出版部 pp.155-160

高橋克壽・森下章司一九九五「山津照神社古墳の調査」京大考古研(編)『琵琶湖周辺の六世紀を探る』pp.3-48

田中一廣一九八七「大和・巨勢山古墳群の群構造と性格(一)」『花園史学』八考 古学特輯号

田中一廣一九九七「子持扁圓劍菱形の裝飾—大和・河内・筑紫の一馬装—」『古文化論叢 伊達先生古希記念論集』伊達先生古希記念論集刊行会 pp.295-308

千賀久・鹿野吉則ほか一九九〇『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町教育委員会

天理大学・天理教道友社編一九八八『ひとものこころ』

榛原町教育委員会一九八六『静岡県榛原町 仁田山ノ崎古墳—出土品保存処理報告』

比佐陽一郎一九九二「埴輪馬の馬具」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ

- ズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会 森浩一編 pp.279-289
- 藤田和尊二〇〇三「大形群集墳としての巨勢山古墳群の性格」『古代近畿の物流の考古学』学生社 pp.215-224
- 益田勝実一九七六『秘儀の島 日本の神話的創造力』筑摩書房
- 松浦宇哲二〇〇四「花文付馬具の編年と系譜」『古文化談叢』第五〇集発刊記念論集(下)九州古文化研究会 pp.65-79
- 松浦宇哲二〇〇五「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室 pp.657-670
- 松浦宇哲二〇〇五「三葉文楕円形杏葉の編年と分析—金銅装馬具にみる多元的流通ルートの可能性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第三冊 pp.525-538
- 宮代栄一九九五「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第七〇号 九州考古学 学会 pp.19-43
- 宮代栄二〇〇二「古墳時代における尻繫構造の復原—馬装が示すもの—」『HOMINIDS』Vol.3
- 宮代栄二〇一六「群馬県高崎市観音塚古墳出土馬具の再検討」『埼玉考古』第六一号 埼玉考古学会
- 名神高速道路内遺跡調査会一九九八『梶原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路遺跡調査会調査報告書 第四集
- 桃崎祐輔二〇〇一「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』一一 pp.1-36
- 桃崎祐輔二〇〇二「6 筑内三七号墓出土馬具から復元される馬装について」『福

- 島県内古墳時代金工遺物の研究—筑内古墳群出土馬具・武具・装身具等 真野古墳群A地区二〇号墳等、金銅製双魚佩の研究復元製作」(復元製作プロジェクトチーム)『福島県文化財センター白河館 研究紀要二〇〇一』pp.36-74
- 桃崎祐輔二〇〇三「斑鳩藤ノ木古墳出土馬具の再検討—三セツトの馬装が語る六世紀末の政争と国際関係—」『市民の古代研究会・関東』第三回講演 pp.80-160
- 桃崎祐輔二〇一七「大塚南古墳の花形鏡板付轡の検討」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書二〇〇集 豊橋市教育委員会 pp.281-297
- 桃崎祐輔二〇一七「沖ノ島祭祀遺跡からみた三女神伝説と舶載文物」『季刊邪馬台国』二〇一七年七月号 pp.42-55
- 桃崎祐輔二〇一八a「新羅系忍冬唐草文鏡板付轡・透彫杏葉の検討」『日韓交渉の考古学—古墳時代—(最終報告論考編)』pp.808-843
- 桃崎祐輔二〇一八b「沖ノ島の馬具」『世界のなかの沖ノ島』春成秀爾編 季刊考古学別冊二七 pp.55-60
- 桃崎祐輔二〇二〇「筑前宗像郡津屋崎町発見」の双龍文鏡板の検討—慕容鮮卑三燕・朝鮮三国・倭国をつなぐ金工の系譜—」『福岡大学考古学論集三—武末純一先生退職記念—』武末純一先生退職記念事業会 pp.455-483
- 森下章司・高橋克壽・吉井秀夫一九九五「鴨稻荷山古墳出土遺物の調査」京大考古研(編)『琵琶湖周辺の六世紀を探る』pp.49-72
- 八木勝行二〇〇七「67 八幡二号墳」『藤枝市史 資料編1 考古』藤枝市史編さん委員会 pp.364-371
- 山口裕平二〇〇四「箕田丸山古墳出土馬具の検討—面繫と尻繫の復元を中心に—」『長崎県・景華園遺跡の調査 福岡県京都郡における二古墳の調査—箕田丸山古

墳及び庄屋塚古墳―佐賀県・東十郎古墳群の研究―補遺編―』福岡大学人文学部
考古学研究室 pp.124-135

山本孝文二〇一四「初源期獅鬚文帯金具にみる製作技術と文様の系統―長野県須
坂市八丁鎧塚二号墳の帯金具から―」『日本考古学』第三八号 日本考古学協会
pp.19-32

行橋市教育委員会二〇〇二『徳永泉古墳・徳永法師ケ坪遺跡 福岡県行橋市大字徳
永所在遺跡の発掘調査報告』行橋市文化財調査報告書 第三〇集

米田敏幸一九九六「後期横穴式石室墳の再検討―河内愛宕塚古墳の石室構造から―」
『古代学研究』一二四 古代学研究会 pp.26-33

韓国文献

慶南考古学研究所・昌寧郡二〇〇一「昌寧 桂城 新羅高塚群」慶南考古学研究所
遺蹟發掘調査報告書

慶南考古学研究所二〇〇五「昌寧末屹里遺蹟」慶南考古学研究所遺蹟發掘調査報告
書

国立慶州博物館二〇一〇『慶州 鷄林路一四號墳』

湖巖美術館一九九七『湖巖美術館 所藏 金東鉉蒐集文化財』三星文化財団

崔正凡二〇一八「所謂皇龍寺型帶裝飾具の再検討」『嶺南考古学』八二 嶺南考古
学会 pp.125-153

張允禎二〇〇五「韓国固城松鶴洞古墳出土馬具に関する検討」『朝鮮古代研究』第
六号 pp.21-34

李漢祥一九九六「六世紀代新羅の帯金具―樓岩里型・帯金具の設定」『韓国考古学報』

三五 韓国考古學會 pp.51-78

李漢祥一九九六「七世紀前半の新羅帯金具に対する認識―皇龍寺型帶金具の設定」
『古代研究』七 pp.27-38

本誌の既刊行分データは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第八号

2022(令和4)年9月発行

発行:「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

(事務局:福岡県 人づくり・県民生活部文化振興課

九州国立博物館・世界遺産室

〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号)